
東方 嘘つきな男と小さな鬼の話

冷えピタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方 嘘つきな男と小さな鬼の話

【Nコード】

N9294V

【作者名】

冷えピタ

【あらすじ】

第1章現代編完結

第2章幻想郷編スタート

男は嘘つきでした。

嘘についてお金を稼ぎ、本音を隠して生きてきました。

鬼は正直者でした。

お酒が大好きというだらしない一面もありましたが、嘘が嫌いであつすぐな少女でした。

まったく真逆の二人が、幻想の壁を越えて出会います。

二人の出会いにはどんな意味があるのでしょうか。

プロローグ（前書き）

読んでいただいて恐縮です^^；
駄文ですが、少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

プロローグ

『いや、国崎さんのおかげで楽に仕事が終わって助かりましたよ』

「あれくらい、どつってことないさ」

電話の向こうから聞こえる若い男の声に、淡々と返すスーツに身を包んだ青年。

国崎和真は高級マンションの最上階にある自室で、高級感漂うソファに座りながら、いつもの仕事仲間と電話越しに会話していた。

『一、十、百、千、万……うわ、六千万もありやすぜ！！ 議員つて噂通り、たんまり金溜め込んでやがるんですねえ……』

「元々は国民が納めていた税金を不正に横領してやがった金だ。それを俺たちが返して貰っただけだろう？」

『へへへ…違いありませんね』

「それじゃあ約束通り、報酬はニコニコ（半分ずつ）ってことで。暇な時にでも口座に振りこんでくれ」

『ほんとにニコニコでいいんですかい？ 自分で言っちゃあなんだが、あっしらは今回ほとんど見てるだけでしたからね。 あっしらの報酬の減額も覚悟してたんですが…』

「気にするな、お前らは十分役に立ってくれたさ。 それに次回からもよろしくってことで」

『…了解しやした。 次もよろしくお願いしやす』

そう言つて相手の男は通話を切つた。

それを確認して和真はソファに深く背中を預けながら大きく息を吐く。

今回の仕事はかなり簡単だった。

標的が議員だと聞いて、念には念を入れて大分前から準備を進めてきたのだが、

取り越し苦労だったようだ。

仲間が作つてくれたパイプを利用して標的の議員に接触。

数ヶ月に渡り親睦を深め、賄賂やら贈り物やらをし続けて、相手が俺のことを信頼してきた辺りで良い儲け話があると持ちかけた。

長年培ってきた話力で相手を乗り気にさせ、自分の代わりに費用を出してくれると頼み込む。

最初こそ悩んでいたようだが、俺に任せて損はさせてこなかったという信用という名の実績があったため、六千万という大金を差し出してくれた。

もちろん、儲け話の内容など嘘っぱちだし、議員が知っている俺の携帯番号も裏ルートで手に入れた、複雑かつ絶対に足がつかない優れものである。

賄賂やらなんやらで三百万ほど使ったが、戻ってくる金はその十倍である。

諸君もすでに分かったと思うが、俺は詐欺師だ。

民間人を狙った詐欺など小遣い稼ぎ程度にしかないなので、標的はもっぱら大手企業の重鎮や、国の役人たちである。

俺の家系はシジイの代から詐欺師で、まだ俺がガキの頃から人間の汚さや詐欺のノウハウを叩き込まれた。

おかげで詐欺師たちの間では俺はちょっとした有名人である。今回のように同業者に頼まれて、協力して仕事をするのも少ない。

人を騙すという糞つたれな仕事だが、そのおかげで俺の通帳には二十億を超える金があるのだから笑えない。

それこそもう二度と真つ当な仕事など出来ないだろう。まあ仕事などしなくても遊んで暮らせるだけの金はすでにあるのだが、特にこれといった趣味がない俺が時間を潰すための手段が仕事しかないというだけである。

もう二十代も半ばであるし、そろそろ新しい恋人でも見つけて、こんな仕事から足を洗って身を固めるのも悪くないとは思っているのだが。

いかんせん長続きしないのである。

過去には数人の女性と付き合ったことがあるものの、半年続いた試しがない。

長くて数ヶ月程度、最速では付き合い始めた次の日にこちらから別れ話を持ちかけた程である。

別に付き合ってきた女性がゲテモノ揃いだったというわけではない。ほとんどの女性が美人で、気立てもよく、一緒に居て心地が良い女性ばかりだった。

それでも俺にはどこか、満たされないという気持ちが強かった。

「まさか自分でも気がつかない、特殊な性癖の持ち主じゃないだろうな」

自虐気味に呟いてため息をつく。
すぐに鼻で笑って、ふざけた妄想を頭の中から追い出した。

「さて、そろそろ寝る準備でも　　ッ!？」

寝室に向かおうと廊下に顔を向けた時、照明の明かりの無い、夜の闇に包まれている廊下に何者かが佇んでいるような気配を感じた。

一体誰が？

扉には鍵が何重にも掛けていてセキュリティは万全だったはず…。まさかベランダから？それこそあり得ない、大体ここは十八階だぞ!？

正体の分からない侵入者に対して焦りが募っていく。
背中をすーっと冷や汗が伝う。

静かに懐に忍ばせておいたピストルに手を伸ばしかけた、その時

「あれ…!？　どこ、どこ？　たしか、霊夢のこの宴会に居たはずなのに…」

幼さが残る鈴のような声が暗い廊下から響いてきた。

足音がだんだんとこちらに近づいてきて、窓から差し込む月明かりでその姿が露わになった。

侵入者に警戒しながらも、相手の容姿を確認した。

オレンジ色の髪に、袖のない奇抜な服装。

腰のあたりには瓢箪がぶら下がっていて、なんとも滑稽に見える。

身長は…低い。かなり低い。というか子供だ。
俺の身長は、平均的な男性の身長より若干低いものの、別に気になるほどでもない。

奇妙な服装をした少女だが、中でも一番目を引くのが…

「……………角？」

少女の頭から伸びる、二本の長い角だった。

嘘について生きる人間、

国崎和真。

酒を飲むのが大好きで、嘘が嫌いな妖怪、

伊吹萃香。

正反対の二人の唐突な出会だった。

プロローグ（後書き）

というわけでプロローグでした。

いかがでしたでしょうか？

ちなみに続くかどうかはわかりませんw

思いつきで書いてみたもので…（汗）

もし作者のテンションが上がれば続きを書かせていただくかもしれませんが（苦笑）

誤字・脱字がありましたらご報告お願いします。

感想とかいただけると泣いて喜びます。

では縁がありましたらまたお会いしましょう。

第一話（前書き）

とりあえず書いたので更新！。

駄文ですね、そして文章が短いかもしれませんが。

一応三人称を基本にしていますが、まだまだバラつきがあるかもしれません。

第一話

「……ガキ、どっから俺の家に入った。不法侵入で警察に突き出してやるつか？」

「ガキ！？ 失礼な人間だね！！ 私には伊吹萃香って名前がちゃんとあるんだから！」

身長差から見下ろして告げる和真に、歯をむき出して睨み付けるように抗議する萃香。

「お前の名前なんざどうだっていい。さつさと質問に答えろ、ガキ」

「ガキガキガキって…人間風情が鬼に喧嘩を売ってただで済むと思ってるのかい？」

和真は聞き慣れない単語を聞いて眉を顰めた。

「鬼？……ああ、そのコスプレのことか」

そう言っつて少女の頭から生える二本の捻れた角を眺める。

「こすぷれ？ よく分かんないけど、私だっつてなんでこんな所に自分が居るのか理解できてないんだ」

困ったような表情で部屋を見渡す萃香の様子を見て、少なくとも嘘はついていないようだ判断する。

「じゃあなんだ。 神隠しにでもあつたつてのか？」

「神の仕業つてのよりは、スキマ妖怪の仕業っぽいけど、ここにくる前にスキマを潜った覚えはないし……」

なにやら考え始めた萃香を置いて、小さくため息をついた。

時計を見ると深夜二時を回っていた。

丑三つ時に鬼を名乗る少女と会おうというのは、なかなか風流なものである。

「…仕方ない。 今日はまだ遅いから泊めてやる。 朝になったらとっとと帰れ」

ぶっきらぼうに吐き捨てるように告げた和真の顔を見て、きよとんとした表情を見せた萃香だったが、次第にニコニコと笑いはじめる。

「いやあ、悪いね。 てつきり今日は野宿になるかも知れないと思つて悩んでいたところさ。 その恩義に報いてさつき私をガキ呼ばわりしたことは許してあげるよ」

「……………そりゃどうも」

今日一番になるであろう大きなため息をついて、今度こそ眠ろうと

寢室に向かおうとした和真を萃香が呼び止める。

「ちょっと待ちなよ」

「……なんだ？」

「私はさっきまで宴会で飲んでたんだけどね、途中でこっちに来たからまだ飲み足りないのさ。付き合ってはくれないかい？」

言われてみれば萃香の頬はうつすらと赤くなっており、口からは酒独特の匂いが漂ってくる。

「俺はもう寝たいのだが」

「なんだい、案外甲斐性のない男だね」

その言葉に露骨にイラツとした表情を見せる。

やはりさっさと追い出したほうがよかったかと後悔する和真を置いて、当の本人は勝手に食器棚を漁ってグラスを二つテーブルに置く。腰につけていた瓢箪から二つのグラスに酒を注ぎ、自分の分の酒を一気に飲み干した。

その様子を眺めていた和真は、もうどうにでもなれと自分も椅子に腰掛け、少女が注いでくれた酒の入ったグラスを傾けた。途端、和真は酒の味に眉をしかめる。

「かなり強い酒だな……」

「そうかい？ 私にとっちゃそれが普通だけど」

そうしている間にも萃香は自分のグラスに酒を注ぎ、二杯三杯と飲み干していく。

「こんなキツイ酒飲み続けてたらずくに潰れちまう」

そんな和真の様子を見て、情けない、とけらけら笑う萃香を無視して席を立つ。

あんなに強い酒をよく水のように飲めるものだ、と呆れながら和真は棚からワインを取り出した。

かなりの年代物のワインで、これ一本で時価数十万円はする。

今取り出したワインのほかにも、かなりの量のワインが並べられているが、皆同じように高額のものばかりだ。

無駄に貯金があるからこそ出来る贅沢である。

別に日本酒が嫌いというわけではないが、どちらかと言えばやはりワインのほうが好きである。

空いたグラスにワインを注ぎ、香りを楽しみながらゆっくりと味わう。

それをじっと見つめる萃香に気がついた和真は、そちらに目を向けた。

「なあなあ、それも酒なのか？　ずいぶんと綺麗な色をしているけど」

確かにグラスに注がれた赤ワインは無色透明な日本酒に比べて綺麗な色をしているだろう。

だがワインの存在くらい子供でも知ってそうなものだが、そこまで珍しいのだろうか。

興味深々と言った様子でワインを見つめる萃香にやれやれと首を振る。

「言っとくが、やらんからな」

「な、なんだよー！ケチー！」

ぷんぷんと音が聞こえてきそうなくらい不機嫌になりながら、萃香は自分の酒をあおった。

今まで黙って見ていたが、小学校に通っているくらいの小さな少女が、自分でもかなり強いと思うような酒を水のように飲む姿はかなりショッキングな光景だ。

別に未成年が酒を飲むな、などと言つつもりはないが、あまりにも幼い外見が酒と不釣り合いで、柄にもなく心配してしまう。

俺らしくないな、と和真は一瞬だけ自分の中で湧いた温い感情を押し殺して、黙々と酒を飲んでいた萃香に声をかけた。

「そう言えば、お前宴会に居たって言ってたが、どこの宴会場だ？」

「博霊神社だよ、あそこには面白いやつがいっぱい集まるからさー」

「ハクレイ神社……？ そんな名前の神社、この町にないぞ。けっこう遠くから来たのか？ 家はどこにある？」

「幻想郷にある妖怪の山だよ」

そこまで言われてようやく和真は自分がかかわれていたことに気がついた。

「……………お前からまともな答えが返ってくると思っていた俺が馬鹿だったか」

「ほえ？　なんか言った？」

「……………なんでもない」

結局、二人は朝日が登るまで酒を飲み続けた。

第一話（後書き）

いかがでしたでしょうか。

更新するかわからないと言った割には早く投稿することができました。

ちなみに原作キャラはしばらく萃香しか出しません。というか最後まで萃香しか出ないと思います。

あえて言おう、萃香だけ居ればいいと！！

誤字・脱字がありましたらご報告お願いします。

ご感想も受付中です。

第二話（前書き）

今回は和真視点です。

なんかいろいろと不自然な箇所が多いかもしれない回です。

第二話

部屋を包む熱気で和真は目を覚ます。

夏の暑さによって蒸し風呂と化した部屋で、二日酔いで痛む頭を持ち上げた。

朝まで酒を飲んでいた挙げ句酔いつぶれて、リビングで寝てしまっていたようだ。

辺りを見回すと、空になったワインの瓶が散乱している。

我ながらよく飲んだものだ、と和真は苦笑した。

いつも和真が座っているソファーには、タオルにくるまって眠っている角を生やした少女の姿がある。

昨夜、和真の部屋に突如として現れたコスプレ少女である。

ガンガンと鳴り響く頭を無理やり酷使して、昨夜二人で飲んでいたときの記憶を思い出す。

酔いが進み、互いに自己紹介をした後、萃香の故郷の話になった。

萃香曰く、妖怪と人間が共存している場所の名前を幻想郷と言っらしい。

世界から拒絶された幻想達が集う最後の楽園。
なるほど、幻想郷とはよく言ったものだ。

大方、頭がお花畑になってしまった少女の妄言の類には違いないのだが、なかなか興味深い話だった。

妖怪と人、どちらかが絶滅してしまわないように互いのパワーバランスを管理する管理者の存在。

幻想郷で起こる数々の異変を解決するという博霊の巫女。

他にも天狗やら、河童やら、萃香のような鬼やらと、様々な種類の妖怪や人間がいるらしい。

信憑性の欠片もない与太話ではあったものの、丁度良い酒の肴になった。

ファンタジーなどに興味を持つ歳でもないのだが、まるで見てきたかのように話す萃香の言葉に興味を惹かれたからだ。

思考を戻し、再び目の前に眠る萃香に視点を合わせる。

「おい、起きろガキ」

気持ち良さそうに眠る萃香の肩を揺らすものの、起きる気配はない。ため息をつきながら、萃香がくるまっっているタオルごと思いい切りソファーから床に引きずりおろした。

ガンツ、という鈍い音が響く。

どうやら落ちた拍子に床に頭をぶつけたらしく、涙目になりながら起き上がる萃香。

「いったあゝ…なにするんだよー……」

「せつかく起こしてやったのに、おとなしく起きなかつたお前が悪い」

未だに頭をさすっている萃香を一瞥して、テレビの電源をつける。適当な番組にチャンネルを合わせた後、洗面台に向かう。冷たい水で顔を洗い、ようやくはつきりと目が覚めた。

……まだ頭は痛い。

リビングに戻ると、萃香はコップに注いだ酒を飲みながら（まだ飲むのか……）昼のバラエティ番組を見ていた。

なにが面白いのかは分からんが、しきりにテレビに映っている某グラサン司会者の発言に答えている。

『みなさん夏休みをどう過ごしてらっしゃいますか？』

「私はねー！お酒飲んだりー、お酒飲んだり、えつと他には……
お酒飲んだりしてる！」

テレビ相手に無い胸を張って自慢する萃香。

「なに馬鹿なことやってんだ、さつさと昼飯にするぞ」

テレビに夢中だった萃香を眺めながらも、フライパンを動かしながらさつさとチャーハンを作り始める。

特別料理が得意というわけではないが、チャーハンにはちょっとしたこだわりがある。

さすがに中華料理店で出されるような本格的なチャーハンには適わないものの、不器用である俺の唯一の得意料理と言っても過言ではない。

炒め終わった二人前のチャーハンを皿に盛り付け、テーブルに置く。すいかは初めて食べるチャーハンに感激した様子で、食事中は終始ハイテンションだった。

「こんなにおいしい料理を作れるなんて、もしかして和真は料理人かなにかなの？」

「そのくらいなら誰でも作れるっつの」

とは言うものの、自分でもこだわりがあるチャーハンを褒められたのは結構嬉しかったりする。

もちろん表情には出さないが。

今まで付き合ってきた彼女たちの料理の腕は俺より遥かに上だった。そんな彼女らに自分の下手な手料理を振る舞ったことなどあるわけもないし、仕事仲間の男たちと飯を食うときはもっぱら外食だ。

つまるところ、目の前で一心不乱でチャーハンを食べ続ける萃香こそが、唯一俺の飯を食った人物ということになる。

「でも本当においしいよ。和真はいいお嫁さんになれるね」

「黙って食え」

チャーハンを食べ終わり、お茶を飲みながらほっとひと息つく萃香に冷たい声をかける。

「さあ、食い終わったならさっさと出ていけよ」

「あゝ……うん、そうだね……あははは、つい居心地がよくなって忘れてたよ。あ、あのさ……よかったら、もうちょっと泊めてくれないかな？」

寂しげな笑みを浮かべながらぼりぼりと頭を掻く萃香。

「親が心配してるだろ。馬鹿なこと言ってるんで早く帰れ」

「それなんだけどね……帰り方が分かんないんだよ」

ここまで来たくせに帰り方が分からないとはどういう了見なのか。また俺をからかっているのではないかと疑ってみるものの、明らかに困ったような表情をする萃香が嘘をついているようには思えない。嘘をつき続けて生きてきた俺だからこそ、相手が嘘を言っているかどうか小さな違和感ではっきりと分かる。

それを微塵も感じさせないところを見ると、やはり嘘はついていないのだろう。

「じゃあとりうえず警察に連れて行くから。あとはそつちで身元確認とか色々やってくれんだろ。これ以上俺のところには居座られても迷惑なだけだしな」

めんどくさそうに吐き捨てる俺の冷たい言葉に、萃香は明らかに落ち込んでいるようだった。

「そつか……そうだよな、うん。ごめんね、迷惑かけるようないと言っちゃって」

「ああ、迷惑だ。　　すげー迷惑だ。　　だからさっさと出る準備してくれ」

「　　ッ！」

萃香は目尻に小さく涙を溜めながらも、いそいそと部屋を出る準備を始める。

そりゃそうだろう。萃香くらいの小さな子供が、面と向かって大人から迷惑だから出て行ってくれと言われたことなどないだろうから。

だから、どうしたっていうんだ。

こいつがこれから先どうなるうが、俺の知ったことじゃ

一瞬だけ、萃香の話の内容を思い出した。

世界から拒絶された幻想。

その幻想に類する“鬼”、伊吹萃香。

もし仮に、そうもし仮にだ。

本当に彼女が世界から拒絶される存在だったとしたら。

ここから出て行った後、彼女は 萃香はどうなるのだろうか。

「あ、あの……………準備できたよ」

目を赤く腫らしているところを見ると、俺が見ていない隙に静かに泣いていたのであろう。

昨日飲んでいた酒の入った瓢箪を腰に添えて、萃香は俺の前に立っていた。

というより彼女にはこの瓢箪以外に、さして荷物などなかった。身の着一つで、彼女を拒絶した世界に放り出されるのだ。

「せ、せめてもう一日だけでも、ここに泊めてくれないかな……………
…？ 下手だけど料理もできるし、掃除もするよ！ 洗濯も、買い物も……………だから、お願い、お願いします……………っ」

最後のチャンスとばかりに、再度俺に頼み込んでくる萃香。

また先ほどと同じように冷たい言葉で拒絶されると分かっている、
縋る相手が他に居ないのだ。

ようやく合点がいった。

彼女は本当に、世間一般で言うところの“鬼”なのだろう。

無限のように酒が出続ける摩訶不思議な瓢箪。

あれも萃香が鬼だという証拠の一つだし、何よりもあの角だ。

萃香が寝ている間に少しだけ触ってみたのだが、抜ける気配どころ
か生き物独特の温かさが手のひらに伝わってきたのだ。

もしも自分が鬼だということがバレてしまえば、帰り方が一向に分
からない状態で敵だらけの世界に一人ぼっちになってしまう。

殺されてしまうこと以前に、この世界でたった一人ということのほ
うが、彼女にとって何よりも恐ろしいのだろう。

だから必死に、ほんの小さな繋がりを持つ俺に縋ってくるのだ。

人間は信用できない。いつ裏切るともしれない。

でも目の前の人間なら？ 一晩とは言え、酒を酌み交わした仲の人
間なら？

そんな思いがひしひしと伝わってきた。

傍から見れば馬鹿げているとしか言えないだろう。

出会って一日も経っていない人間に縋ろうというのだから。

自分でもわかっているのだろう。

それでもなお、目の前の人間をひたむきに信じる萃香に向けて

「さっさと行くぞ、馬鹿ガキ」

いつもと変わらない、冷たい声が投げつけられた。

「……………うん」

萃香は絶望を表情にありありと浮かべて、消え入るような声で呟いた。

もう味方は居ない。

何人の人間を殺し、何度傷つきながら、どれだけの時間を一人ぼっちで居なくてはならないのだろうか。

そんな思いが、萃香を襲った

その瞬間

目の前の人間が大きいため息をつく音が彼女の耳に届いた。

「はあ……早くその瓢箪部屋に置いてこい。瓢箪持ったガキなんかと二人で歩いてたりなんかしたら、俺が周りから変な目で見られるだろうが」

「え？」

「さっさとお前の服買いに行くぞ。いつまでもその服一枚で居るつもりか？ 何度も乾燥機回さなきゃなんなくなるだろうが。それに、新しい布団やら歯ブラシやらも買わないとな」

ようやく萃香は俺が言った言葉の意味を理解したようだった。

無意識に流れ出る涙をぼろぼろと零しながら、何度も必死に頷く。

「うんっ！うんっ、うんっ！」

「……………なに泣いてんだか」

その場にしゃがみ込んで、ポケットから取り出したハンカチで萃香の涙を拭ってやる。

涙を拭いてやっているっていうのに、当の本人はさらに大量の涙を流し始めた。

嗚咽を上げながら、何やら必死に礼を言おうとしている。

「ありが……………と、ありが……………」

「分かった、分かったから」

突然俺の胸目がけてタツクルをかましてくる萃香。

「ぐおっ！！？」

あまりの衝撃で心臓が止まりかけた。

こんな小さな体のどこにこんな力があったのだろうか。

そのまま俺のスーツを涙でびしょびしょに濡らす萃香を見て、小さく、でも今までとはどこか違うため息をつくのだった。

ジイさん、オヤジ、うるさい同居人が一人増えました。

第二話（後書き）

どうでしたか？

一応当初考えてたイベントは半分ほど消化できました。

次回からはまたほのぼのに戻ります。

第三話（前書き）

いつのまにやらPVが2000件超えてました。

こんな駄文を大勢の人に見られていると思うと、キーボードを打つ手が震えてきますがなんとか頑張って書き続けたいと思います。

第三話

家族連れで賑わう郊外のショッピングモールに、周りからじろじろと注目されている一組の男女の姿があった。

男の方は、スーツ姿で黒眼黒髪の平凡な顔立ち。どこにでも居るような風貌をしているが、極悪人のような目つきの悪さで、殺人を犯したと言われれば納得してしまいそうになる。

もう一方の女……と呼ぶにはいささか難しい小さな少女のほうは、隣を歩く男と比べてもかなり奇抜な格好をしていた。

日本人離れたオレンジ色の髪に、袖の干切れたような服。

そして何より、少女の頭についている二本の角のようなアクセサリが否応無しに目立っていた。

二人の様子は恋人同士というには歳が離れすぎているように見受けられるし、兄妹にしては二人の顔立ちはあまり似ていなかった。

角のアクセサリをつけた少女はきよるきよると辺りを見渡して、初めて見るであろう風景に興味深々といった感じだ。

男はというと、自分たちを見つめる野次馬たちを鋭い目つきで睨み返している。

傍から見ていてだけで恐ろしい目つきだというのに、その目で真正面から睨みつけられた野次馬たちは慌てて目を逸らして我先にとそこから遠ざかっていく。

野次馬が散っていったのを確認すると、スーツ姿の男、国崎和真は、せわしなく視線を動かし続ける少女、伊吹萃香に声をかけた。

「瓢箪より先に、お前のその角をどうにかしなくちゃならんかったな。注目されるとは分かってたが、やっぱり我慢ならん」

「む、鬼の誇りである角を邪険にするとはいいい度胸だね」

「埃か。邪魔にしなければならないという点では確かにその通りだな」

「字が違うじゃないのさ！」

二人の当初の目的だった洋服売り場に到着する。

今日は特に自分の服を買いつもりもないので、和真は紳士服のコーナーを一瞥もせずさっさと二人して婦人服のコーナーに向かう。

萃香はこれほどたくさんの服が売られている光景を見るのが初めてだったらしく、その迫力に圧倒されているようだ。

「じ、ここに置いてあるのが全部服なのかい……？」

「ああ、そうだが？別にこんな安物しか置いてない店で遠慮はいらんから、好きなの探してこいよ」

「とは言っても、外の世界でどんな服装が普通なのか分かんないよ」

「む……それもそうだな」

近くで服を並べている従業員らしき女性に声をかける。

「こいつに合う服を適当に見繕ってやってくれ」

「かしこまりました」

営業スマイルを浮かべながら、戸惑う萃香を連れて、女性はささと服を選んで萃香に手渡していく。

そのまま試着室にズルズルと連れて行かれる萃香は、売られていく子牛のような目で和真を見つめていた。

そんな萃香の眼差しとは裏腹に、和真はさっさと休憩用のベンチに腰掛けて大きなあくびをしていたのだった。

数分後、ベンチでうつらうつらと船を漕いでいた和真だったが、目の前に人が立つ気配がして顔を上げる。

そこには涼しげな純白のワンピースに身を包んでいる萃香が、少し恥ずかしそうな表情で立っていた。

見た目が幼いこともあり、少々子供っぽいであろうその服装も妙に萃香に似合っていた。

先ほどの奇抜な服装とは一変して、清楚というイメージが浮かぶ。

「えっと……どう、かな？ 似合ってる？」

「あー、似合ってるんじゃないか？ 色も涼しげでいいな」

もじもじと手を絡めて上目遣いで和真を見つめる萃香に、少しだけ視線を逸らしながら投げやりな様子で声をかける。

言い方には多少棘があるものの、彼にしては珍しく、素直に相手を褒めている。

それを聞いた萃香は、ぱあっと笑顔を浮かべて、萃香の後ろでニコニコと微笑んでいる従業員の女性に顔を向ける。

「千恵が選んでくれた服、似合ってるって褒められたよ！ ありがとうね！」

「どういたしまして」

微笑みながら、萃香の頭を優しく撫でる知恵と呼ばれた女性に和真も小さく頭を下げる。

余程嬉しかったのか、鼻歌まで歌い始める萃香に小さく苦笑して、和真はレジへと向かった。

支払いの際、ゴールドカードを提示した和真にレジの従業員が目を見開いて驚いていたのはまた別の話である。

その後、萃香用の花柄の布団を購入した二人は、オレンジ色に染まる空の下、人気もまばらな帰り道をゆつくりと歩いていった。今日一日いろいろあって流石に疲れたのか、萃香は和真の背中で気持ちよさそうに寝息を立てている。

おかげで両手が塞がってしまい、購入した服や布団は家まで郵送してもらったことにした。

「つくづく迷惑かけてくるガキだな……どっかその辺に捨てて帰ろうか」

そうは言ってみるものの、昼過ぎに見た萃香の涙を流す姿を思い出した和真は、うっ、と息を詰まらせる。

「……………まあ、また泣かれても面倒だしな」

根では人一倍お人好しである彼がそんなことを出来るはずもなく、流石に痺れてきた腕をなるべく意識しないようにしながら、洪々と足を進めるのだった。

第三話（後書き）

鬼と一緒に買いものでした。

主人公の嘘つき属性が出てないじゃん！って思ってる読者の方ゴメンナサイ。

後々ちゃんと出てきますのでご勘弁を…… ^^ ;
誤字・脱字等ありましたらご報告ください。
みなさまからのご感想お待ちしております！

第四話（前書き）

ユニーク10000突破!!

嬉しすぎます、みなさんほんとうにありがとうございます！！

第四話

和真の住んでいるマンションのロビーに着くと、背中で寝息を立てている萃香に声をかける。

「ほら、着いたぞ。 さっさと起きて自分の足で歩け」

「ふぁ……………うん、分かった」

まだすっかりと頭が働いていないのか、ふらふらとした危なっかしい足取りで歩き始める萃香。

エレベーターに乗り込んで和真の部屋がある階のボタンを押す。エレベーターが動き始めると、萃香は和真の足に寄りかかるようにして、また船を漕ぎ始める。

そんな萃香の額目がけて強めのデコピンをする。

「痛っ!?! なにするのさ!」

「こんなところでまた寝るやつがあるか」

「うっっ……………」

額を押さえて涙目で睨む萃香を尻目に、目標の階へと到達したエレ

ベーターから降りる和真。

その後ろを慌てて追いかける萃香だが、ふと視線を感じて後ろの通路を振り返るが、そこには誰も居なかった。

「……………?」

「なにしてんだ？ さっさと入らないと鍵閉めるぞ」

部屋の扉から顔を出してこちらに声をかける和真。

萃香は先ほどの視線を不思議に思いながらも、小走りで和真の部屋へと滑り込んだのだった。

「おいガキ、飯の前に風呂入っとけよ」

「ふる……………？ ああ、湯あみのことね。妖怪はそんなもん入らな

いよ」

「妖怪とか人とか関係あるか。 お前ちょっと汗臭いぞ」

「う、嘘!？」

慌てて自分の体の匂いを嗅ぐが、確かに少し汗臭い。

妖怪は通常、自分の身に纏う妖力で汚れや匂いなどから身を守っているために湯あみなど自分の体をケアする行為は必要としない。

だが外の世界に来て、自分の体から妖力の類が見られないことに萃香は気づいたのだった。

「いいからさっさと入れ。 シャンプーとかの使い方は分かるか？」

「い、いや……わかんない」

「……………仕方ないな」

ため息をついて萃香へと近づいていく和真。

そしてひょいっと萃香を脇に担ぐと、ずんずんと風呂へ向かっていく。

「ちょ、ちょっとなにをするのさ!？」

「うるさい、いちいち説明すんのも面倒だから。一緒に入れば万事解決だ」

「一緒に！？ 嫁入り前の娘と裸で風呂に入るなんてどういう感性してるんだい！」

「ああ……？ ガキの裸なんかいちいち気にしないから安心しろ」

「あ、あたしが気にするんだよ！」

ぎゃーぎゃーと騒ぐ萃香を無視して脱衣所のドアを閉める。

そして何の躊躇いもなく自分の服を脱いで素っ裸になると、萃香の服を脱がしにかかる。

「か、和真！ 前隠して、前！ って、無表情であたしの服を脱がそうとするんじゃないよ！ ちよ、ちよっと！！ ぎゃー変態！ 変態だー！！」

「うるさい」

さっさと萃香の服を剥ぎ取ると、和真は一足先にシャワーを浴びる。

和真がゴシゴシと体や髪を洗ってる間も、萃香は風呂場に来ようとはせず、真っ赤な顔で脱衣所から顔だけを出してこちらを伺っている。

体についた泡を流すと、湯船に一気に肩まで浸かって深く息を吐く。

「くうああ〜……………極楽だ」

しばらく天井を見つめていたが、ふと視線を未だに脱衣所に居る萃香へと向ける。

「なにしてんだ、さっさと入らないと風邪引くぞ」

妖怪が風邪など引くことはないのだが、妖力の無い今の萃香では分らない。
観念したようにおずおずと風呂場に入り、恐る恐る湯船に足をつける。

「……………」

「風呂に浸かるだけでどんだけ真剣な表情してんだよ」

小さく苦笑して、まだ膝すら湯に入り切れていない萃香を持ち上げて一気に風呂へと浸からせる。

「ひゃっ!?!?」

驚いたような声を上げる萃香。

初めて入る風呂の感触に混乱していたようだったが、次第に落ち着いていき、今では和真の膝の上にちょこんと座っている。

「ふう……初めて入ったけど、なかなかいいもんだね。人間はいつもこんないいモノに入ってるのかい？ 妖怪の山にも作ろうかな」

「全員が全員どうかは知らないが、まあ普通はそうだろうな。妖怪の山ってところには風呂がないのか……汗臭そう」

学生の頃に嗅いだ剣道場の更衣室の汗臭い匂いを思い出してうんざりとする。

「そういえばさ、和真」

「なんだ？」

和真の胸に頭を乗せて湯船に浸かっていた萃香が、ひょこっところからへ顔を向ける。

「和真はどんな仕事してるんだ？ 幻想郷の人間は畑仕事とか、商

人だったりとかが普通だったけど、外の世界の仕事も似たようなものなのかい？」

「商人はともかく、畑仕事が普通ってことはないな。たぶん畑仕事をしてる人間はこっちでは一割にも満たないと思う」

「じゃあどうやって作物を育ててるのさ？ 見たところ、幻想郷と人間の数が大違いだ。こんなにたくさんの人間の食い分をどうやって賄ってるのさ」

「ほとんど海外からの輸入に頼ってるな。ほかの国との貿易がなくなったらこの国は間違いなく亡ぶ」

「情けない話だねえ」

「まあ、な……その分、技術力ではかなりのレベルを誇ってると思うぞ」

「河童が聞いたら喜んで飛び跳ねそうだね」

河童……？ 河童と言ったら川で相撲してるかキュウリ食ってるイメージしかないのだが。

そんなことを考えつつも和真は先ほどの萃香の質問に答えることにした。

「俺の仕事の話だったな。まあ、あれだ。悪いやつをこらしめてお金を稼いでるんだ」

「へえ、霊夢みたいな仕事かな。まあ霊夢は万年貧乏だけど」

「霊夢……博霊の巫女だったっけか。流石に俺は妖怪退治なんかできないけどな。もっぱら相手は人間だよ、どいつもこいつも糞みたいな外道ばかりさ。………まあ、その外道のやつらから奪った汚い金で生きてる俺も糞みたいな人間だが」

最後の部分は呟くように言ったため、萃香は聞き取れなかったようで首を傾げている。

「人に嘘ついて金を得ている糞みたいな職業もあるってことだよ」

「ふん………あたしは嘘つきは大っ嫌いだね。殺してやりたくなるくらい嫌いだよ。そんなやつらをこらしめるのが和真の仕事なんだろ？ 私は尊敬するよ」

花の咲くような笑みを浮かべて和真を見つめる萃香。心から和真を信頼しているであろう、純粋な少女。

そんな萃香の笑顔を見て、和真の胸がチクリと痛んだ。

いつかこの少女に、自分の本音を言える日が来るのだろうか。

「……………ああ、そうだな。ほら、お前の髪洗ってやるからそこ座れ」

ゴシゴシと後ろから洗われる髪に、気持ちよさそうな声をあげていた萃香だったが、和真が頭に垂らしたシャンプーが目に入った途端に絶叫を上げるのだった。

第四話（後書き）

誤字・脱字ありましたらご報告お願いします。
みなさんからのご感想お待ちしております。

第五話（前書き）

異常に短い上に会話文がないですが、次話へのつながり + だと思っ
てお許しください ^^;;

第五話

和真視点

風呂から上がり、鏡の前で萃香の髪にドライヤーをかけて乾かしてやる。

萃香はドライヤーから吹き出される熱風に驚いていたが、おとなしくされるがままになっている。女性
女性の長い髪を乾かした経験など持ち合わせていなかったため、壊れ物を扱うように慎重な手つきで乾かしていく。

その後、リビングに戻ると夕飯のおかずを買い忘れていたことに気が付き、でもどっちにしろ萃香のせいで両手が使えなかったあの状況では一緒だった、と自己完結する。

とりあえず有り合わせの材料で何か作ろうと冷蔵庫を開けるものの、ネギや卵、ハムなどが少しあるだけだった。

今からコンビニへ買い出しに出かけてもいいのだが、腹を空かせている萃香を待たせてしまうのも気が引ける。

仕方なしに、今朝作ったチャーハンと同じものを作り始める。

一日に二回もチャーハンを食べるのは流石にどうだろうかと思いつつ、かといって他に手っ取り早く萃香の腹を満たせる方法が思いつかなかったので、文句の一つでも甘んじて受けようと覚悟していたのだが、イスに座って待っている萃香の反応は予想を裏切るものだった。

運ばれてくるチャーハンを見るや否や、その真ん丸な瞳をキラキラと輝かせる萃香。

更には並べていたスプーンを手に取り、鼻歌を歌いながら、空いたグラスをスプーンで叩いて音色を奏でている。

不器用な男が作ったチャーハンをそこまで気に入ってくれたのか、と思わず顔に出そうになる笑みをなんとか押さえつける。

萃香の前にチャーハンを盛った皿を置くと、しきりにスプーンでチャーハンを口に運んで、おいしい、おいしい、と笑顔を見せる。

今度チャーハンの上に刺す旗でも買ってきてやるか、と思いつつ、
自分もチャーハンを食べ始めた。

うん、うまい。

食器を洗い終わり、リビングでくつろいでいた萃香に目を向ける。

腹がいっぱいになって眠たくなったのか、昨日は絶えず飲み続けていた酒の入った瓢箪にも手を付けずに、とろんとした目でぼんやりとテレビを見ている。

そんな萃香の肩をとんとん、と軽く叩いて立ち上がらせ、洗面所で萃香に歯ブラシの使い方を説明する。

刺激の強いミント味の歯磨き粉の味に、露骨に嫌な顔をしながらも、俺に並んで歯ブラシを動かし続ける。

ペッ、と口の中の歯磨き粉を吐き出した萃香に、水をついだコップを手渡し、よくうがいさせる。

俺はコップは使わずに、手で水をくみ、口に含んでペッ、と吐き出した。

目をこしこしと擦る萃香の手を引きながら、寝室に向かう。

あいにく、萃香の布団はまだ届いていないため、萃香を俺のベットに寝かせて自分はリビングのソファで眠ろうとする。

しかしベッドに潜り込んだ萃香は、一向に俺の手をはなそうとしない。

どこかに置いていかれてしまうという不安が、まだ心のどこかに残っているのだろうか。

今朝のことがトラウマになってなければいいが……と内心冷や汗をかきながらも、なんとか萃香の手をはなそうとするものうまいかない。

小さくため息をついて、自分もベッドに潜り込んで萃香と向かい合うようにして寝ころぶ。

萃香は俺のシャツの胸元をぎゅっと握りしめ、すやすやと眠りに落ちて行った。

俺自身も今日一日色々あつて体が疲れていたのか、すぐに瞼が重くなってくる。

だるい腕を上げて、眠っている萃香の頭を軽く撫でてやる。

すると気持ちよさそうに身をよじらせながら、俺の胸元に顔を摺り寄せてきた。

（嫁さん貰う前に、子供が出来たみたいだな……）

胸の中で眠る萃香の様子を微笑ましく想いながら、俺は眠気に身を任せた。

第五話（後書き）

誤字・脱字のご報告お願いいたします。
みなさまからのご感想お待ちしております。

第六話（前書き）

急展開ですね。

すみません、お楽しみください。

第六話

味噌汁の良い匂いがリビングに漂う。

和真は黙々と朝食の準備を進めていた。

キッチンに立つ和真の服がくいくいと引っ張られる。

「和真、和真」

「あん？」

見ると、萃香がキラキラと何か期待したような瞳で和真を見つめていた。

恐らく今日の朝食はまだなのか訊ねに来たのだろう。

そう考えた和真は味噌汁をかき混ぜる手を止めずに、横に居る萃香に話しかける。

「腹減ったのか？ もうちょっとで出来るからおとなしく待ってる」

「違う違う！ たしかにお腹は減ったけど、そのことじゃないんだ
「よ」

「……………なんだよ？」

すると萃香は人差し指をビシッとリビングにあるテレビに向ける。

そこにはつい先日開園したばかりの遊園地のCMが流れていた。迫力満点のジェットコースターや、恋人と思しき二人が乗っているコーヒーカップ。

そして子供たちが気持ちよさそうに泳ぐテーマパークならではの趣向を凝らした屋外プール。

(今年の夏は海にも行っていないな……)

そんなことを思いながらも、しきりに服を引っ張りつづける萃香へと視線を戻す。

「で、なんなんだよ。別にテレビが壊れたわけじゃないみたいだけど」

「ゆーえんち！」

突然、大声で叫ぶ萃香に驚いて半歩後ずさる和真。

「……………遊園地が、なんだ？」

「ゆーえんちに行きたいの！連れて行っておくれよ！」

和真がうんざりとした表情で萃香を見る。

「遊園地って……ガキかよ。 いや、お前の見た目からすると確かにその通りなんだが……」

「な、なんとも言えばいいさ。 とにかくあたしはあそこに行きたいんだ！ なあ、頼むよ、和真あゝ」

朝一番に面倒な話題を振ってきたな、と舌打ちしそうになる自分を抑えて、和真は小さくため息をついた。

「……行きたいなら一人で行けよ。 こんな暑い日に外に出たくない」

まだ八月も半ばである。

外ではアブラゼミやらミンミンゼミやらが猛暑の中、自分の命を削って糞やかましい音楽を奏でている。

ただでさえ暑いというのに、あの声を聞くだけで体感温度が2、3度は上がるような気がする、とは和真の言である。

「あたしが一人で行けるわけないだろ？ ゆーえんちつてどこまでの道も知らないし、大体一人で行っても面白くないんじゃないかい？」

「……確かに一人で遊園地に行くやつはめったに居ないだろうな」

思い浮かべてみて欲しい。

周囲がカップルや家族連れ、もしくは仲の良い友人たちと一緒に居るというのに、たった一人で黙々とアトラクションに乗り続ける哀れな姿を。

何の罰ゲームだと思いたくなくなるくらい悲しい光景であることに違いない。

「……さっき届いた荷物の中に昨日買ったお前の服が入ってたろ。

飯食ったらそれに着替えてこい」

和真の言葉に、ぱあっと表情を明るくさせる萃香。

ご機嫌な様子で目玉焼きの乗った皿を運ぶ萃香とは裏腹に、和真は自分はいつからこんなに甘くなったのか、と頭を抱えていた。

多くの客の笑い声が響く昼下がりの遊園地のベンチで、スーツ姿の和真は病人のように顔を青ざめさせていた。

「うつぷ………………。あの糞ガキ……………コーヒーカップを本気で回すやつがあるか……………」

その原因は先ほど萃香と一緒に乗ったコーヒーカップにあった。

初めて乗るアトラクションに興奮していた萃香は、中央の皿を回すと乗っているカップも回ると和真に教えられ、これでもかと言うほどに回し始めたのだ。

あっという間にのどかなはずのコーヒーカップが絶叫マシーンに早変わりである。

嬉々とした表情で皿を回し続ける萃香をなんとか止めようとした和真だが、突如襲い来る猛烈な吐き気にダウンしてしまったのだった。

地獄のような時間が過ぎ、ふらふらとコーヒーカップから立ち上がる和真と、まったく応えていない様子の萃香の姿に周りの客も引いていた。

今は萃香に近くの売店にソフトクリームでも買いに行かせ、和真は休憩用のベンチで激しい吐き気と格闘していたのだった。

「ただいま！ あれ、和真ってばまだ漬れてるの？」

スキップしながら戻ってきた萃香は、先日和真とシヨッピングモールに出かけて購入した白いワンピースを着ており、手には2人分のソフトクリームを握っていた。

「誰のせいだと思ってるんだ、誰の」

顔を歪めながら萃香から和真は自分のソフトクリームを受け取る。

萃香も和真の横に腰掛け、目を細めながらソフトクリームを美味しそうに食べている。

「ゆーえんちって楽しいね、和真！」

「……………あぁ、そうだな」

目の前を行き交う人々の姿をぼんやりと眺めながら、小さく呟く。

（そういえば、遊園地なんていつ以来だろうか。小学校に入ってからすぐに母親が死んで、それから一度も来てなかった気がする）

昔のことを思い出して妙に寂しげな気分になるが、ふと萃香が自分の顔を見つめていることに気が付いた和真は、萃香へと顔を向ける。

「どうした？ 俺の顔に何かついてるか？」

その言葉に萃香は小さく首を横に振り、そして何やら照れたような笑みを浮かべる。

「いや、和真とこうやって一緒に居られると思うとすごく嬉しいって思うんだ。自分でもなぜだか分かんないけどさ、うん、すごく嬉しい」

「……………そうかよ」

まっすぐな気持ちをぶつけてくる萃香に、和真は顔を背けてしまう。今までこんなに素直に自分の感情をぶつけてくる相手など知らなかったからだ。

人間というのは、いつも腹の中に何かしら邪念を抱えている。

口でいくら取り繕おうと、その気配がひしひしと伝わってくるのだ。

昔付き合った女性の中にもその気配を感じさせる人が居た。

和真が持っている莫大な金が目当てなのか、それとも裏に対するコネが目的だったのかもしれない。

しかし和真の目の前に居る少女からは、まったくその気配が感じられない。

常に自分の本心を目の前の相手に正直に伝える萃香が、和真には眩しく光る太陽のように思えた。

「それで、ずっと和真と一緒に暮らせたらな、って思うようになったんだ。も、もちろん迷惑だっことは知ってるよ！ でも、少しでも長い間、和真と一緒に居たいんだ」

顔を真っ赤にして自分の気持ちを告白する萃香。

そんな萃香を愛おしく想う自分の気持ちに、和真は気づいた。気づいてしまった。

今まで自分の本心を晒したことのない彼が、目の前の少女にだけなら、心を開けるのではないかと。

「あ、あゝ……その、な。 別にお前がずっと居たいって言うなら、俺は構わないぞ。 ガキの一人や二人を養う金くらい、余裕である

んだからな」

その言葉を聞いた萃香が、その表情を驚愕の色に染める。

「ほ、本当に……？ でも、迷惑なんじゃ……」

「たしかに迷惑だが、我慢してやらないこともない。あまり俺に苦勞をかけない、っていう条件付きだが」

萃香は今日一番の笑顔を浮かべ、和真の胸に飛びついた。

そして手に持っていたソフトクリームで和真のスーツを汚し、言った傍から怒られるという愚拳を犯してしまったのはまた別の話。

空が茜色に染まり始め、和真は腕時計を確認する。

午後5時。そろそろ帰らなければまた夕飯の材料を買い忘れてしま
うだろう。

まあ別に外食しても構わないのだが。

「おい、そろそろ帰るぞ」

目の前を歩いていた萃香の後ろ姿に声をかける。

「えー、もう？ もうちょっと遊んで行こうよー」

「お前今日一日でどれだけアトラクションに乗ったと思ってるんだ。
俺はもう無理だ、内臓が悲鳴を上げてる」

「ぶー、分かったよ……」

少し待ってて、と和真に告げて公衆トイレへと向かう萃香。

やれやれと思いつつ首を鳴らすと、後ろから何者かに声をかけられ
た。

「はじめまして、国崎和真さん」

振り向くと、金髪の若い女性が居た。

和真が今まで生きてきて一度も見たことのないような美人である。着物のようなものを羽織り、かなり目立つ格好をしているのにも関わらず、周りの人間は女性のほうを見向きもしない。

「国崎和真さん……で、合ってますよね？」

一体そんな女性が自分なんかは何のようなのか、と疑問に思いつつ返事を返す。

「そうですが……どこかでお会いしたことありましたっけ？」

「いえ、私があなただのことを一方的に知っているだけですよ、国崎和真さん」

裏の関係者かと思ったが、女性で自分の素性を知っているような人物は組織には居ないはずだと和真は混乱する。

「はあ。それで、あなたのお名前は？」

「申し遅れました。八雲藍と申します」

(八雲……八雲……やっぱり知らない名前だな)

「その八雲さんが、俺に何の用事ですか？」

八雲藍と名乗った目の前の女性は、萃香が向かった公衆トイレのほうに目を向ける。

「あの子は、あなたにとってどういう存在ですか？」

「あの子、とは？」

和真は十中八九、萃香のことだろうとは分かっている一応確認する。

「伊吹萃香　　かつて人が恐怖した、鬼。　　忘れ去られた幻想の住人のことです」

和真の体中の鳥肌が立つ。

真剣な目つきで和真を見つめる藍からは、目には見えぬプレッシャーのようなものを感じる。

そして、萃香の素性を知っている見知らぬ女に、和真は一気に警戒心を強めた。

「答えてください、国崎和真さん。伊吹萃香はあなたにとって、
どういう存在なのかを」

和真の頬を一筋の汗が伝う。

対人戦において少なからず自信のある和真を、自然な振る舞いにも関わらず気配だけで圧倒する藍。

和真は、乾いた唇を小さく開き、震える声で、それでも確かに言い放つ。

「あいつは 俺の家族だ」

和真の言葉を聞き、今まで微塵も表情を動かさなかった藍が初めて驚愕という表情を浮かべた。

「家族、ですか？　あの鬼が、あなたの家族だと言っているのですか」

信じられないというような声で呟く藍。

「鬼とか人とか、そんなこと関係ないんだよ。　あいつはあいつだ。伊吹萃香だ。……………違うか？」

震える体にムチを打ちながらも、必死に藍をにらみつける和真。

もしお前が萃香の敵ならば、俺は容赦はしない　　そんな想いの籠った和真の眼差しを見て、藍は小さく笑った。

「私はあなたたちの敵になるようなことはしません。　ですが明日、私の主が伊吹萃香を迎えに來ます。　そうすれば、もう二度とあなたと伊吹萃香は会うことは無いでしょう」

それでは、と小さく会釈して藍と名乗った女はスキマのような物の中に消えて行った。

一人残された和真は、無言で茜色に染まり切った空を睨み続けていたのだった。

第六話（後書き）

次話から少しシリーズ。
でもやっぱり作者はほのぼのが好きです。

第七話

八雲藍に遊園地で告げられた内容、それは藍の主が萃香を迎えに来るといふものだった。

その翌日、和真は萃香の手を引いて和真が住んでいるマンションからさほど遠くない公園に来ていた。

日は昇りきっているが、不思議なことに二人以外に人影は見えない。

何の事情の説明もされずにこの場に連れてこられた萃香は、昨日遊園地で自分がトイレから戻った時から終始無言で眉を顰めている和真に困惑していた。

自分が何か和真を怒らせるようなことをしてしまっただろうか、そう考えてみるものの、遊園地で一緒に居た時の和真は面倒くさそうな表情こそ浮かべていたものの、時々そつと笑みを零すなどの普段の彼と比べても機嫌が良さそうに感じられた。

それなのに何故　？　萃香が考えを巡らせ始めたその時、公園の中央にある時計台の下で目を瞑ったまま立っていた和真が、ふと顔を上げて公園の入り口を睨みつけた。

その視線を追うように萃香もまた入り口へと目を向け、その瞳を驚きで見開く。

何もない空間からチャックのついた窓のようなものが現れ、そこから日傘を持った女性が現れる。

昨日会った八雲藍と同じ金髪の女性だが、藍を美女というならば、こちらは大人と少女の丁度中間のような顔立ちをした美少女だろう。だがその外見からは似つかわしくない膨大な威圧感がひしひしと伝わってくる。

日傘を差した少女は、こちらを見つめて三日月のような歪な笑みを浮かべた。

「ごきげんよう、国崎和真。……いえ、こう呼びましたほうがよろしいかしら？ 先祖代々から受け継がれる、悲劇の少年の呪いを背負った不幸な半妖　人狼、国崎和真」

目の前の少女　幻想郷最強の妖怪、八雲紫から告げられた真実に、萃香は呆然と和真を見上げる。

和真は辛そうな表情で唇を噛みしめ、自分を見つめる萃香のほうを見ようとせせず、ただ楽しげに微笑む紫に顔を向けていた。

あるところに小さな村がありました。
とても小さな村でしたが、村人たちの仲は良く、平穏な日々が流れていました。

その村に暮らす少年は、小さい頃に両親を病で失いました。

両親を失ったことで塞ぎ込んでいた彼に、村人たちは必死に話しかけました。

はじめは返事すら出来なかった少年に、村人たちは根気よく面倒を見ました。

村人たちの努力のおかげか、次第にその少年にも笑顔が戻り始めます。

返しきれないほどの恩を村人たちから受けた少年は、少しでも村人たちの役に立とうと頑張ります。

まだ二桁にも届いていない年齢の少年が、大人の男たちの間に交じって、汗で視界が滲みながらも必死に畑を耕し、

村の女性たちの間に交じって、不器用な手つきで何度も包丁で手を

切って怪我をしながら料理を作る日々を送り始めました。

健気に頑張る少年を村人たちは温かく見守っていました。

そして少年も、自分が少しずつでも村のみんなに恩を返せていると実感できる日々に満足していました。

そんな少年に、悲劇が訪れます。

少年が十度目の誕生日を迎えたその日、彼の体に一つの呪いが掛かっています。

【嘘をつかなければならない程度の呪い】

少年が本当のことを言うたびに、体中に焼けるような激痛が走りまわりました。

村人たちにそのことを話そうとしても、痛みが邪魔をします。

また、誰とも話さないようにしても、一定時間以上誰かに嘘をつかなければ同じように激痛に襲われました。

自分を世話してくれた村人たちに恩を返したいと願っていた彼は、嘘をつくことを極端に嫌がりました。

ですが、そのたびに少年は理不尽にも激痛に襲われます。

次第に少年は痛みに屈服していきました。

村人に会ったたびに嘘をつき、夜になると大声で「狼が出た！」と村中を走り回りました。

あんなに素直だった彼が何故こんなことを　　？　村人たちの誰もがその疑問を持ちましたが、毎日のように繰り返される少年の嘘に呆れ果て、その疑問は忘却の彼方へと葬り去られました。

少年は一人、枕を涙で濡らします。

あの人たちに嘘をつきたくない、と。　　自分は恩を返し切れていないのに、と。

そんな時にも呪いは彼の体を蝕みます。

嘘をつけ。　嘘をつき続ける。　痛いのはもう嫌だろう？　嘘をつこう。　それで自分は救われるのだから。

彼はまた今日も夜の村を走り回ります。

「狼が出たぞ！」

そう叫びながら。

そんな日が何日か続き、彼の居場所は村のどこにも無くなってしまいました。

今まで少年に笑顔で接していた村人たちは、少年の顔を見るたびに苦虫を嚙んだような表情を浮かべます。

少年は生まれてからずっと住んでいた我が家に別れを告げ、森の近くにある無人の小さな小屋で寝泊まりするようになりました。

ここに居れば必要以上に村人たちに嘘をつかなくて済む、と。どうしても耐えられなくなった時、また村を走り回ればいいから、と。

夜中、水を汲むために小屋の外へと出た少年の目についたのは地面に残った複数の獣の足跡。

この大きさ、形からして、間違いなく狼のものでした。

その足跡は一直線に村のほうへと向かって続いています。

村に獣に対抗できるような武器はありませんでした。せいぜいが畑仕事で使うような農作業の道具くらい。

しかも時間は真夜中、村人たちは全員眠りについています。

みんなが危ない。

気が付けば彼は村へと駆け出していました。

村へたどり着いた彼は、ざっと辺りを見渡します。

村の中にはすでに狼が数匹侵入していましたが、まだどの家も襲われた様子はありません。

少年は大きく息を吸い込み、大声で叫びます。

「狼が出たぞ!!」

体に走る激痛。 激痛。 激痛。

手が、足が、胸が、頭が、焼けるように熱い。

肉が体の中で燃やされているような、そんな感覚。

気を失いそうになりながらも必死で叫び続けます。

「狼が出た！ 狼が出たんだ！！ みんな、逃げてくれ!!」

ちらほらと家の明かりが灯り、うんざりしたような表情の村人が窓から顔を覗かせます。

またいつもの嘘つき少年か、とても思っていたのでしょうか。

しかし彼らの目に映ったのは必死に叫びつづける少年に襲いかかる狼たちの姿。

肉を引き裂かれ、激痛で体を痙攣させながらも、村人たちの身を一心に察じ、勇敢に叫ぶ少年の姿に、村人たちの瞳から涙が零れていました。

そして怒りの雄叫びを上げながら数人の男が家から飛び出してきました。

その姿を見るや否や、狼たちは慌てて逃げ出して夜の森の闇へと消えていきました。

残されたのは血の海に沈む嘘つきの少年だけ。

男たちは今にも息絶えそうな少年を抱き起して必死に傷を塞ごうとしました。

けれど少年の体から流れ出る血は止まりません。

少年の瞳からは光が失われ、震えていた指先も動かなくなりました。

最後に幸せそうな笑みを浮かべて、嘘つきだった少年は最後に正直者になりました。

この話が色んな人に伝えられ、そのたびに少しずつ内容も変わって
いきました。

けれど今でもその話は現代に残っています。

『オオカミ少年』として、哀れな少年のお伽噺として。

第七話（後書き）

誤字・脱字等ありましたらご報告お願いします。
みなさんからのご感想お待ちしております。

第八話（前書き）

主人公の能力がお披露目です。

第八話

「国崎和真はずっと貴女に嘘をつき続けていたのよ。自分が人間であるとまで嘘をついて、ね」

八雲紫は三日月の笑みを浮かべながら呆然としている萃香を見やる。

「嘘だ…和真が私に嘘をつくわけじゃないか……ッ！和真は、ときどき意地悪だけど、それでもすごく優しくして！それで、それで……」

「彼が優しいことと嘘つきだということの間にどんな関係があるのか理解できないのだけれど……。いいわ、私が真実を教えてあげましょう」

紫は手にしていた日傘をくるっ、と一回転させると、静かに瞳を閉じる。

そして彼女は語り始める。嘘つきの男が生まれてから誰にも話したことのない秘密を。

国崎和真という男の真実を。その身に負いし罪を。

「あるところに、嘘つきの少年が居たわ。だけど彼は望んで嘘をついていた訳ではない。理不尽な呪いをかけられていた……嘘を

つかなければその身を滅ぼすという呪いを。

その少年の血肉を食らった狼が居た。元々、妖の類だった狼は、少年の血肉を食らったことでその少年の呪いを受け継ぐことになってしまった。

狼とは本来、気高き生き物。それが死ぬまで嘘をつき続けなければならぬという呪いに犯された……その苦悩が、鬼である貴女には分からないかもしれないけど。

……話を戻しますね。狼の身でありながら嘘をつき続けなければならなかった彼らは、ある種の自己暗示のようなものを自分に掛けるようになった。

自分は狼ではない、すぐに嘘をつく穢れた人間だ、と。その歪んだ願いがどういう訳か叶えられ、彼らは人として人に混じって生きてきた。嘘をつき続けながら。

そして人間の身になったことで、寿命も人間と同じく極端に短くなってしまった。だから彼らは子孫を残し、自分たちの種が絶滅しないようにしたの。

呪い付きの狼が子をなせば、その子に呪いを受け継がせることになる。そして何代にも渡り、彼らはその呪いを身に宿してきた。

……違うかしら？ 国崎和真」

和真は紫の話を黙って聞いていた。

紫の問いかけに答えるわけでもなく、ただただ沈黙を守っていた。

「今の話……本当なの？」

恐る恐る萃香が自分の横に立つ和真に問いかける。

「　　」

和真は答えない。答えることが出来ない。

真実を口に出してしまえば、彼女はもう二度と自分に向かって笑顔を見せてくれないだろうから。

彼が初めて心を開いた少女に拒絶される。そんなことになってしまえば、間違いなく彼の心が　　国崎和真という人格がそこで終わってしまうから。

妖怪としての狂った人格を押さえつけるために作られた偽りの人格、“カズマ”。

その人格が崩壊したとき　　自分の中の妖怪が、目の前の少女を殺してしまうかもしれない。

伊吹萃香は、紫の口から告げられた真実をなんとか自分の中で否定しようとした。

けれど、真実を告げられた時のその辛そうな和真の表情は、紫の言葉を裏付ける証拠としては十分すぎて。

萃香は目の前が真っ暗になるような感覚に襲われた。

萃香は信じていた。和真は自分と真正面に向き合ってくれていると。

まだ出会って1週間と経っていないが、遊園地で自分に言ってくれた和真の言葉。

『あ、あゝ……その、な。別にお前がずっと居たいって言うなら、俺は構わないぞ。ガキの一人や二人を養う金くらい、余裕であるんだからな』

自分のわがままに、誠実さを持って答えてくれた和真。

彼の性格は理解しているつもりだ。なかなか自分の感情を表に出すことが出来ない、不器用な青年。

そんな彼が照れながらも、自分に言ってくれたのだ。

ずっと家に居てもいいと。男女が同じ家で暮らす、それはつまり

遊園地で遊んでいる最中、その言葉を何度も何度も思い出して、和真の気づかないところでよく真っ赤になったものだった。

だからこそ、信じられなかった。

彼がいままでずっと自分に嘘をつき続けていたことが。

けれど、分かってしまった。

紫や自分の言葉に返答しないことによって、彼が嘘をつき続けていたことを。

そして何より 彼のその表情を見て、彼が嘘をつくことを心から嫌悪していると。

だから、そんな表情を見せる和真が、萃香には悲しくて、愛おしくて。

気が付けば萃香は、和真の手をぎゅっと握っていた。

それを見た和真が、信じられないとでもいつかのような表情を見せる。

「萃、香……………?」

「やっと、名前で呼んでくれたね」

珍しく困惑しているような和真を見て、萃香はクスリと笑う。

「どっ、して…………俺は、お前にずっと嘘をついてたのに…………鬼ってのは、嘘が嫌いなんだろ…………? それなのに、なんでお前は…………」

俺なんかには、そんな笑顔を見せるんだよ…………

その言葉を聞いた萃香は苦笑いを浮かべ、静かに首を横に振る。

「確かに、和真が私に嘘をついていたっていうのはショックだった

よ。それに腹が立った。でもそれ以上に、和真が嘘をつくことを嫌がっていたのに、それに気づけなかった自分に腹が立った」

「馬鹿だろ……お前……どこまで、お人好しなんだよ……」

知らず知らずのうちに和真の頬に涙が伝った。

けれどその涙はとても温かくて、和真の心に在ったはずの氷を静かに溶かしたのだった。

そんな二人の様子を見つめていた紫は、微笑みながら和真に声をかける。

「あなたの体に掛かった呪い、それは真実を口にするたびに全身を火で焼かれるような痛みを襲われるというもの。並大抵の妖怪ではその呪いに屈服するほかない。しかし貴方は先日、藍に伊吹萃香は自分の家族だと告げたそうね？」

国崎和真の監察から戻った従者の藍から、そのことを報告された時、紫は心底驚いていた。

彼は言ったのだ。その鬼は自分の家族だと。口にするだけなら簡単で、とてもとてもちっぽけなもの。

けれどその瞬間、彼の体には呪いによる激痛が走っていたはずだ。

それはその言葉が彼の偽りのない本心だったという証。

苦痛を表情にこそ出さなかったものの、公園で紫が現れる丁度その時まで、満足に喋ることすらできないほどに消耗していた。

それを萃香は、和真の機嫌が悪くなったと勘違いしていたようだったけれど。

「和真……………」

萃香は心配そうな表情で和真を見る。

そんな萃香に、和真は心配ないと手を振る。

その瞬間、紫がパチツと手を鳴らした。

紫の行動の意味が分からない和真は、小さく眉を顰める。

「私の能力で、あなたの体と呪いの間の境界を操りましたわ。今なら嘘をつかずとも、痛みに襲われる心配はありませんわもつとも、呪いが強すぎて、この状態を維持するのは5分が限界でしようけど」

「なんのつもりだ…………？」

和真が自分の体に意識を集中させると、確かに今まで心臓を鎖のよ
うなもので巻きつけられていた感覚が消えている。

しかしそんなことをしても紫にはなんのメリットもないはずだ、と
思考を巡らす。

「国崎和真、伊吹萃香　　あなたたち二人の在り方は、私が幾
千の時で見えてきた中でも特に美しいもの。　そんな二人のお別れの
挨拶を邪魔する無粋な不純物を、取り除いてあげただけですわ」

クスクスと口に手をあてて微笑む紫に、萃香が一步踏み出して睨み
つける。

「私は帰らないよ、紫。　和真と離ればなれになるなんてもつての
他だ」

萃香に続くように和真もまた、紫を見据える。

「だ、そうだ。　俺の大切な家族を連れて行くというのなら、ここ
で貴様を潰す」

そして和真は、今まで抑えていた妖力を解放する。

「ッ!?」

和真から放たれるその膨大な妖力に、紫どころか隣に居た萃香までもが驚愕の声を上げる。

幻想郷に居た頃の萃香に勝るとも劣らない量の妖力。そしてなによりも、その妖力に混じっている、神聖な力を感じた。

「……………ようやく合点が行きましたわ。 神話の生き物である、“天狼”。それが地上の穢れによって妖怪化した一族。その末裔」

「懐かしい名前だが、過去の栄光に囚われるのはもうやめたんだ。今ここに居るのは、ただの人狼。 国崎和真だ！」

和真は叫び、己の能力を解放する。

【真を嘘にする程度の能力】

和真から放たれた光の粒子が萃香の周りに集まり、それが霧散すると萃香は驚いたように声を上げる。

「私の妖力が、戻ってる……！？」

和真は紫を見据えたまま、萃香に声をかける。

「すまん、万が一の事を考えて、初めて会ったときにお前の妖力を俺の能力で抑えていた」

真を嘘にする程度の能力。その名の通り、実際にあつたものを無かったものとする能力である。

これによって萃香の妖力を“なかった”ことにしていた。万が一妖力を感じ取れる人間に見つかって、萃香の身に危険が降りかからないようにと。

その封印を、今解き放つ。

「さあ、八雲紫。 あいにく俺たちの“日常”にお前は必要ない」

嘘つきの男は進む。

彼が心から愛している、大切な家族を守るために。
今この瞬間だけはすべての嘘を殴り捨てて、心からの想いを、自分の横にいる彼女のためだけに

「はじめようか紫。あんたとやるのは久しぶりだが　　ここ
数日、妖力を使えなかったんだ。あいにく手加減できそうにないよ
？」

小さな鬼は進む。

自分の想い人と共に進む道を、誰にも邪魔されないために。
最強の妖怪と謳われ、人々に畏怖された鬼の力を、自分の横にいる
彼のためだけに

「……………く、くくく……………」

紫は心底楽しそうに、嗤う。　　ああ、本当にこんなに楽しいのはいつ以来だろう、と。

幻想郷の管理者となった今、ほとんどの妖怪は紫の姿を見るだけで恐れ慄いていた。

そんな自分と対等に渡り合える相手など、片手で数えるほども居ない。

皆、戦う前から負けを認めているのだ。

それなのに、目の前に居る二人の姿はなんだ？

伊吹萃香は言わずもがな、戦闘の経験がほとんど無いに等しい国崎和真ですら、自分との力量の差が分かっているはずなのに。

あの二人は互いという存在を守るためだけに、圧倒的な存在である自分に立ち向かってきているのだ。

素晴らしい、本当に素晴らしい。

紫は心からの賞賛を二人に贈る。

だが二人の一途な願いは、到底叶わぬ儚き夢。

なぜならば、二人の目の前に居るのは 真正正銘、最強の妖怪なのだから。

幻想郷最強の妖怪 八雲紫は、その大きすぎる力を、解放した。

「鬼の異端児と百の年も迎えていない若造が幻想郷の母に楯突こうというの？ ふふっ、いいわ。あなたたちの全身全霊を以って私を楽しませなさい」

ここに戦いの火蓋が切って落とされた。

第八話（後書き）

9 / 2 3 加筆・修正

1 0 / 7 主人公の能力名を変更。

第九話（前書き）

気が付けばPV21000 ユニーク3400になっていました。
お気に入り登録も48件……何が起きたし！？

第九話

side:紫

迫り来る弾幕の嵐を避けながら、私は小さく舌打ちをした。
というのも、目の前に対峙する二人の実力が予想を遥かに上回るものだったからだ。

伊吹萃香　　鬼の四天王のひとりとしても名高い彼女の實力は、
その噂に違わないものであった。

こちらの弾幕を容易く回避し、一気に距離を詰めて拳を突き出して
くる。

ただの拳と侮るなけれ。その力は古来より人が畏怖して止まなかつ
たもの。

回避こそ出来ていたが、その拳圧により、私の頬には数か所の切り
傷が出来ていた。

そして一番のイレギュラーは、人狼　　国崎和真の存在だった。
彼が放つ弾幕には、一つ一つに膨大な妖力が込められており、戦闘
経験の浅さからまだまだ荒削りな部分が残るものの、一発でも直撃
してしまえば私でも大ダメージを受けることは必須だろう。

何より厄介なのが、彼の能力である。

【真を嘘にする程度の能力】

これによって、私が放つ弾幕を文字通り“嘘”へと変化させる。

つまりは、当たらないのだ。

弾幕があったという事実そのものを嘘へと変えてしまうその力はもはや神の領域である。

境界を操る程度の能力という絶対的な能力を持つ私と対になる程の強力無比な能力。

国崎和真が弾幕を張り、その弾幕の隙間を掻い潜るようにして伊吹萃香が私へと突進してくる。

更には伊吹萃香に直撃しそうになった弾幕を国崎和真の能力で嘘へと変化させ、弾幕をかき消す。

敵ながら天晴なコンビネーションだ。

今や幻想郷中に知れ渡っている一組 博麗の巫女とただの魔

法使いの少女によるコンビネーションにも劣らないほどの連携。

予想だにしなかった苦戦に、額に汗が滲んでいるのが分かる。

再び国崎和真から放たれる高密度の弾幕。
それをギリギリのところまで回避しながら、伊吹萃香の姿を探す。

(居ない……！？ そんな馬鹿な……一体どこに？)

きよろきよろと辺りを見渡して見るものの、そこに目標の姿は発見できない。

すると、背後から伊吹萃香の雄叫びが上がった。

「はああああッ！！」

振り返れば、拳を振り上げる鬼の姿がそこにあった。

いつの間に背後に回り込まれていたのか そんな今更な考え
に小さく苦笑する。

伊吹萃香の能力 【密と疎を操る程度の能力】。

この能力によって自身を霧へと変化させ、全ての物理攻撃から回避
することが可能となる。

更には隠密行動にも長けており、霧状態へとなった彼女を見つける
ことは容易なことではないだろう。

つまり、伊吹萃香は国崎和真が弾幕を放つと同時に、自分を霧へと変化させ、私の背後に回り込んだということ。

体の重心を少しずらして、迫る来る拳を回避する。

それと同時に拳圧で腹部の服が弾け飛び裂傷を負うも、渾身の力を込めた拳を避けられたことで体勢を崩している伊吹萃香の横腹に蹴りを叩きこむ。

「がはっ!？」

小さな体が転がり、公園内に設置されていた遊具へと叩きつけられる。

「ッ!？ 萃香あ!!」

その光景を見た国崎和真が、こちらに弾幕を張り巡らしながら倒れ込む萃香の方へと跳躍する。

咳き込む萃香を抱き起し、顔についた砂を払い落とす。

「大丈夫か!？」

「ゴホッ……心配、ないよ……」

痛みで顔を顰めながらも、なんとか言葉を返す萃香に和真はギリッと奥歯を噛みしめる。

萃香を地面に下ろし、和真が立ち上がった。

私を睨み付け、弾幕を撃とうと構える。

大切な家族を傷つけられたのだ。彼の怒りは最もだろう。そしてその怒りに鼓舞するように跳ね上がる妖力。

けれど、それこそが“穴”

冷静さを失った相手ほど御しやすい存在はない。

そう、彼が冷静だったならば難なく避けられていただろう一撃。

彼の目の前に突然現れた、隙間から放たれる一発の鋭利な弾丸。

それが、彼の腹部を容易く貫いた。

「うっ！」

口から大量の血を吐いて、和真は地面に片膝を着く。

腹部から流れ出る大量の鮮血　　素人目に見ても、それが致命傷であるとはつきりと分かる。

伊吹萃香と同等の妖力があると言っても、彼の体は人間のもの。つまりは高火力であるが装甲は紙という、アンバランスな存在なのだ。

そもそも、神でもなく妖怪でもなく人でもない彼という不安定な存在が、今まで私と対等に戦っていたことすら奇跡だったのだ。

「和真！　まさか、怪我したのか！？」

必死な表情で叫ぶ萃香に、和真は振り返ることすらしない。この小さな娘に傷を見られて、心配させたくなかったから。

和真は息を吸い込み、小さく萃香に呟いた。

「萃香、お前と過ごしたこの数日間は死んでも忘れない。
忘れることなんて、出来るわけないだろ……こんな迷惑なガキの
ことなんて」

「なに、を……?」

萃香に背を向けている和真の表情は、萃香からは見ることが出来な
い。

しかし、和真と真正面から向き合っている私からは彼の表情をはっ
きりと見ることが出来た。

笑っていた。

今まで誰にも自分の本性を見せたことのない彼が。

涙を零しながら

それでも満面の笑みで。

「そういえば、もうすぐ昼飯の時間だったな……。今日も、チャ
ーハンでいいか？ ……と言っても、それ以外はロクに作れないん
だが」

息も絶え絶えになりながら、必死に言葉を紡ぐ和真。

そんな和真の様子に、ただ事ではないことを悟ったのだろう。
立ち上がり、急いで和真の傍に向かう萃香。

そして和真から流れ出ている血を見て、息を呑む。
慌てて彼の体を横たえて、萃香は自分の膝に和真の頭を置いた。

もう彼が長くはないことを悟ったのだろう。
萃香の瞳からはぼろぼろと涙が溢れだし、それでも和真の言葉に満
面の笑みを以って応える。

「うん、和真のちゃーはんは世界一だからね！ でも、今度はみん
なも呼ぼうよ！ みんなで、和真が作ったちゃーはんを食べよう！」

「ああ……みんなで、か。いいな、それ。中華料理ならそこそこ作れるから、店を出すのもいいな……。詐欺師は、もう廃業だな」

苦笑しながら、だんだんと瞳が閉じられていく和真。

そんな和真の意識を少しでも繋ぎ止めようと、萃香は必死に声をかける。

「詐欺師なんて、和真には似合わないよ。誰かを不幸にする仕事より、誰かの笑顔が見れる仕事のほうが、和真だって好きだろう！？」

「ああ……そうだな。そんな仕事も、してみたかった」

「すればいいじゃないか！ これからどれだけでも出来るさ！！私が手伝う、他でもないこの私が手伝うんだ！！出来ないなんてことがあるか！！」

「お前……家事、できたっけか……」

小さく笑う和真を見て、涙を零しながら萃香も笑う。

「これから覚えるさ。もちろん、和真が教えてくれるんだろう？」

「……ああ、教えるとも。どこに出しても恥ずかしくなくらい、立派な女に育ててやるさ」

そう、それはi fの話。

そんな未来もあつたかもしれない。

二人が小さな店を切り盛りし、苦労はあるけれど充実した毎日を送る日々。

二人の間に嘘など無く、幸せな毎日がずっと続いていく。

そんな、もしもの未来があつたかもしれない。

けれど現実残酷で

彼の瞼は、重く閉ざされてしまった。

第九話（後書き）

まだ完結じゃないですよ？

追憶・小さな鬼の話（前書き）

今回は全面萃香視点です。

ツイッターのアカウント凍結されました。

ま、まさか開始二日で凍結されるとは……恐ろしいぞツイッター。

ちょっとおせうさまのおしっこについてつぶやいてただけなのに凍結とか……

追憶：小さな鬼の話

side：萃香

そう、それはきつと初恋だった。

鬼という身に生れ落ちて幾千の月日を数えてきた私だが、あいにく色恋沙汰というものに縁がなかった。

誰かと恋をするということよりも、強敵と戦い酒を飲みかわすことが一番楽しかったからだ。

今思えば自分もまだまだ子供だったのだろう。

つけ加えるなら、この小さな体。

コンプレックスに思ったことなど一度もないが、女の色気と言つものが微塵も感じられないこの体に欲情を抱く者が居るはずもなく

いや、何事にも例外はあった。

極稀に私のことを熱っぽい視線で見つめる者も居ることには居たが、鬼の四天王の一人という貫禄を持つ私に言い寄れる度胸のある男が居なかったというだけの話である。

まあそんなこんなで、生娘のように純潔を守ったまま齢だけを重ねてきた。

地上の人間たちに絶望し、鬼たちは地底へと姿を消した。
当然私も付いて行ったのだが、何の刺激もない毎日に嫌気が刺し、
再び地上へと舞い戻った。

そこで暇つぶし程度に考えた異変を起こし、博麗の巫女との決闘に
敗れた私はいつの間にか地底へ帰ることも忘れて幻想郷中をフラフ
ラしていた。

宴会が開かれると聞けば飛んでいき、昼間は博麗神社で酒を飲みつ
つ霊夢を観察する毎日を過ごすようになった。

そう　　全てが始まったあの日も、私はいつものように博麗神
社で開かれる宴会に出席したのだ。

次々と訪れる妖怪たちと互いの武勇伝なんかを話しつつ、酒を飲む。
酒も回りかけてきたころ、飲み仲間たちにちよつと失礼するよ、と
言い残して神社の脇にある厠へと向かった。

用を足し終え、厠の扉を開くとそこにあつたのは見慣れた神社の光
景ではなく　　真つ暗闇。

微かに差し込む月明かりのほうへと歩みを進めると、そこに居たの
は一匹の人間。

黒髪黒眼の日本人らしい特徴だが、なんとも人相が悪い。鬼たちには気に入られそうだけど、人間相手だと怖がられて近寄ってさえこないだろう。

そんな外見とは裏腹に、霊力が微塵も感じられないちっぽけな存在だった。

そしてまあ色々あって、二人で飲むことになったわけだが。

さっきの人相の悪い男の名は国崎和真というそうだ。

彼と話していて分かったことは、ここが幻想郷ではないということ。

それにしても、国崎……国崎ねえ？ 幻想郷に居る間に外の人間の苗字も色々と変化しているみたいだ。

そんなことより彼が飲んでいた色鮮やかな酒が目についた。

私がついている瓢箪からは無限に酒が出て来るが、かといって同じ味の酒を飲み続けていれば流石に飽きが来るといふもの。

少しだけ分けてもらおうかと思ったけれど、乞食でも見るかのような目つきで私を見てくる男が癪に触って、結局自分の酒を飲み続けていた。

翌朝、頭を襲う痛みで私は目を覚ました。

見ると、目の前で和真が何やら小さな機械をいじっていた。どうやら手荒な方法で起こされたようだ。

本当につくづく鬼に対して喧嘩を売ってくるやつだ……ここは一度どちらが上か分からせておいた方がいいだろうか？

と、そこまで考えて自分の体に纏わりついていた布きれを見やる。

寝たときにはこんなものなかったはずだ、と記憶を探り、自分が眠りについた後に彼がそっとかけてくれたのだと理解する。

そういえば、誰かに布団をかけてもらうなんて一度もされたことなかった。

皆自分より先に寝てしまっし、そうでなくてもほったらかしにするような連中ばかりだった。

なんだ、むかつくところはあるけど、結構いい奴じゃないか。

なぜか箱の中に入っていた人間と会話をした後、和真が作ったというチャーハンを食べた。

これがすごくうまかった。今までこんなにうまい料理を食べたことなどあっただろうか？

酒にはあまり合わなそうだが、それを置いても本当においしい。

いい嫁になれると褒めたんだが、怒られてしまった。
なんでだ？

その後、まあ色々あった。

え、色々って何かって？ い、いやあ……流石に私の口からそれを言うのはちよつと恥ずかしい。
人前で泣くなんて赤ん坊の時以来だったから、本当に恥ずかしかった。

そして涙を流す私を、めんどくさそうな表情をしながらも拭ってくれた彼の行為が嬉しくて、更に泣いてしまった。

……………うん、ほんと恥ずかしい。これは黒歴史として封印することにする。

よく分からないけど、和真は私を家に置いてくれるらしかった。

私が落ち着いた後、和真は私を促すようにしてどこかに歩き始めた。もしかして、どこかに置いていかれるのだろうか。そんな不安が頭を過った。

そんな私の様子を見てか、和真はやれやれと私の手を握ってくれた。その手がとても温かくて、心からほっとした気持ちになった。

しばらく歩くと、大きな建物の前に着いた。

和真曰く、しょっぴんぐもある？っていうやつらしいが、よく分からない。

幻想郷に住む人間より多くの人間が一つの建物の中に居て、とても驚いた

そしてたくさん服が売られている場所へ行き、そこで私の服を買った。

どんなものが似合うのかも全然分からなくて困ったけれど、店で働いていた千恵という女性を選んでくれた服を和真に見せると、彼から珍しく褒められてしまった。

たったそれだけなのに、顔に熱が灯るのが分かる。

なんなんだ、これは……？

今まで経験したことのない不思議な感覚。

私は、随分前に知り合いの妖怪が言っていたことを思い出していた。

『いいですか、萃香さん！ 恋っていうのはですね、相手から褒められたりすると胸がぎゅゅっとなつて、顔がぼかぼかしてしまうものなんです！』

顔がぼかぼか……ま、まさか！ これが恋！？

鬼である私が人間の男に恋をしたなんて信じられなかった。

けれど帰り道、朝泣いたせいなのか急に眠気が襲ってきた私を背負ってくれた彼の背中の中を熱を感じた時、今度は胸がぎゅぐゅとなつて、また顔がぼかぼかなくなってしまった。

そして彼の温もりが心地よくて、私はいつの間にか眠りに落ちてしまった。

家に着くと、風呂に入れと言われた。

妖怪にそんなものは必要ない、と言ったのだが、汗臭いと言われてびっくりした。

慌てて体の匂いを嗅ぐと、確かに汗臭い。

私はそこでようやく、幻想郷の外に出てから自分の体から妖力が感じられないことに気付いたのだった。

もしもあのまま、彼に追い出されていたとしたらぞっとする。

妖力のない今、私の力は小娘同然なのだ。

外敵が現れれば、身を守る術はない。

冷や汗を流しながら、彼の質問に適当に返していた私だったが、ふいに自分の体が宙に浮く感覚を感じて我に返った。

見れば和真が私の体を脇に抱えている。

どういつつもりか聞くと、彼は私と風呂に入ることにしたらしい。

って、ちょちょちょ！ちょっと待った！！

どうして急にそんな話になってるの！？ていうか本気なの！！？

どうにかして彼を説得しようと試みたが、聞く耳持たずといった感じで和真は脱衣所の扉を閉めた。

そして彼は何の躊躇いもなく自分の服を脱ぎ始めたのだ。

更には私の服を脱がそうとこちらへ近づいてくる。

初めて見る男のアレが、生娘の私には衝撃的すぎて大混乱してしまった。

自分でも何を言っているか分からない叫びを上げながら必死に抵抗したものの、するつと服を脱がされてしまう。

まさか想い人の前でこんなに早く裸を晒すことになってしまうなんて想像もしていなかった。

もう恥ずかしくて恥ずかしくて、顔から火が出そうだ。

うつうつ……見られてる。 絶対見られてるよね……………

恐る恐る閉じていた目を開くと、そこにはすでに浴室へ入って石鹸で体を洗い始めている和真の姿が。

それを見てずるつと足が滑ってしまったのは仕方ないと思う。

和真は体に付いた石鹸を洗い流すと、ゆっくりと湯船に肩を沈めた。なんとも気持ちよさそうな声を出して湯に浸かっているの、そんなに気持ちの良いものなのかと脱衣所からこっそり覗く。

すると彼と目が合って、さっさと入ってこいと言われた。

……もう裸は見られてるんだ。 どうにでもなれ。

半ばヤケクソで浴室へ足を踏み入れる。

そして湯船に恐る恐る足をつけていった。 し、仕方ないじゃないか。 体中を湯につけるなんて初めての経験なんだから。

そんな様子の私を見て和真は苦笑すると、私を持ち上げて一気に湯の中に浸からせた。

一気に体の温度が上がったような感覚に、小さく肩を震わせたものの、慣れてきたらこれがなかなか気持ちがいい。

和真の膝の上に座って、風呂の気持ち良さを堪能した。

それから和真と風呂の中で色々と話をした。

和真は正義の味方なんだそうさ。いつか鬼退治に来てくれないかな？

とか思っていたら、しゃんぷーとか言っちゃつで鬼退治された。あれはほんとに反則だよ。 あ

翌朝、私が人の入っている箱を見ているとゆーえんちとかいうすごいのが映っていた。なんでも、新あたらしくしょん？とかいうのが追加されたのどうのこうので、とにかくすごいのだ！

幻想郷にゆーえんちなんて無かったから、一度行ってみたいくて和真に頼み込んだ。

どうかOKを貰えて、目玉焼きが乗った皿を机に運んだ後、急いで和真に買ってもらった服に着替えた。これを着て和真の隣を歩いてたら、周りからは恋人同士に見えるのかな……？（どう見ても兄妹です）

自分で考えたことに恥ずかしくなって頭を振りながら、彼との新しい一日に想いを馳せていた。

ゆーえんちに着くと、そこにはしょっぱいピンぐもおるよりもたくさんの方が居てびっくりした。

受付の女性に貰った案内書きを熱心に見ていると、そこにはこーひーかっぷっていう乗り物の横に小さく、カップルにおすすめ！って書いてあった。

カップルの意味くらい流石に分かる。あれだ。その、こ、恋仲というやつだ……。

これは何が何でも行かなくてはならない。小さく拳を握りしめて、

和真の手を引っ張ってこーひーかつぶ目がけて走り出した。

興奮した私がこーひーかつぶを回しすぎて、和真の具合が悪くなったりと色々事故があったものの、いいこともあった。

勇気を出して告白した私に、和真がOKしてくれたのだ！（勘違いです）

恋仲というだけではなく、更には私に、ずっと家に居ていいと言ってくれたのだ。

男女がずっと同じ家で暮らす……それはつまり

恋仲を通り越して、結婚！？（勘違いです）

嬉しすぎて彼の胸に飛びついてしまった。

その後で何故か彼に怒られてしまった。早速亭主らしくなってきたね、和真。（関係ありません）

夕暮れ時、楽しかった時間も終わる。

そろそろ帰るぞ、という和真の言葉に答えて、私は小走りですぐ向かう。

この時間が終わってしまうのは残念だけど、まだ明日がある。明後日もある。

夫婦なんだから、これから先ずっと一緒に居られるんだ。

和真のおいしいご飯を食べて、一緒に楽しい時間を過ごして……あ、私も料理の勉強くらいしたほうがいいかもしれないね。

その時は和真が教えてくれるかな？ でも和真にもお仕事があるし

……

そっだ、お金を貸してもらって料理の本を買って来よう。

本を見ながらなら私だって出来るぞ！

和真、おいしいって言うてくれるかな？

ずっと、一緒に居たいな。

ずっと、和真の傍に居たい。

鬼であることを捨てても、彼の傍に。

そう、これが初恋。

小さな鬼の、初めての恋。

けれど運命は、そんな二人の絆を無慈悲に引き裂いた。

追憶・小さな鬼の話（後書き）

感想貰えると作者の元気がぐんぐん上がります。

第十話（前書き）

今回は少し短いですが、次回からの伏線ということでお気に入り登録数が驚くほどに増えてます。みなさん、本当にありがとうございます。

第十話

「和真！ 和真！ 目を開けてよ、かずまあっつ！！」

瞳を固く閉じ 力無く横たわる和真に、萃香はしきりに声を掛ける。
萃香の瞳からは止めどなく涙が零れ落ち、その手は和真の体から出る血で真っ赤に染まっていた。

けれどそんなことは意にも介さず、ただただ鬼の少女は悲しみの慟哭をあげる。

「思ったよりも脆かったわね。まさか一発でゲームオーバーだとは思わなかったわ」

嘲笑うかのように告げる紫に、萃香の動きが止まる。

ゆらりと幽霊のように顔を持ち上げる萃香。

その彼女の瞳からはすでに光は失われていた。

表情の失われた顔で紫を見据え、だらんと垂れ下がった両腕の先にある拳に力を入れる。

目の前で嘲笑う女は、幻想郷の母でも、自分の古くからの宿敵でも、はたまた気の合う親友でもない。

自分のすぐ傍で静かに横たわる和真の 仇。

彼の体温が、恋しい。

あの日つないだ、温かった彼の手は、今はもう動かない。

こいつが消した。彼の温かさを消した。

彼の笑顔が、愛おしい。

けれどももう、彼に笑顔が戻ることはない。

こいつが壊した。彼の笑顔を壊した。

小さな鬼の少女は、嘘つきな男のことを狂わしいほどに愛していた。

「お前が……お前さえ居なければ……ッ！」

ぎりつと奥歯を噛みしめる萃香の瞳には感情の色が戻っていた。

しかしそれは彼女本来の色ではない。

少女の瞳に宿るのは、復讐の炎に満ち溢れた黒々とした感情の色。

紫はそんな萃香を一瞥して、小さくため息をつく。

自分の傍で横たわる男の行動から何も学ばなかったのか、と。

怒りに身を任せた愚か者に待つ結末は敗北しかないというのに。

「 来なさいな、伊吹萃香。 あなたの悲しみも憎しみも、
幻想郷は全てを受け入れますわ」

紫がもう幻想郷の外に居る理由はない。

そもそも萃香を連れ戻しに來ただけだったのだ。

さっさと隙間を使って目の前の鬼を幻想郷へ送り還す。ただそれだけ。

その際邪魔だった人狼の男を始末するために戦っただけのこと。

その男を始末した今、いつまでも時間を潰している余裕などない。

まだ博麗大結界に起きた異変について、具体的な解決方法
が見つかっていないのだから。

紫の能力で萃香の足元に隙間を発生させる。

ズズズ…… と音を立てて、萃香は足から隙間に飲み込まれていく。それに気づいた萃香は、なんとか脱出しようともがくものの、抵抗むなしくすでに膝まで隙間に飲み込まれていた。

(イレギュラーの存在はあったけど、これで予定通り……。早く帰って藍に温かいお茶でも入れてもらいましょう)

自分の勝利を確信する紫。

当然だ。彼女には自分の能力に対する絶対の自信があったのだから。しかし、それはあくまで彼女の能力を妨害しない者が居なかったら
の話で……

ふっ、と紫が息をついたその瞬間

「「ッ!?!?!」」

膨大な妖気が、二人の周りに充満した。

辺りを見渡して見るものの、当然の如くこの場に居るのは紫と萃香の2人だけ。

しかしこの妖気は二人のうちどちらのものでもない。

妖怪にはそれぞれ妖気に特徴がある。

今この場に充満している妖気は、お互いのものではないことはすぐに分かった。

一体誰が　　紫は探るような視線を先ほど自分が殺した男の体に向けて、息を呑んだ。

死んだはずのあの男から、恐ろしいほどの妖力が漏れていたのだ。

馬鹿な　　紫が呆気にとられたような表情をし、その表情に気付いた萃香もまた、自分の背後を振り返ろうとした、その瞬間。

和真の体が、跳ねるようにして起き上がった。

第十話（後書き）

和真くん妖怪化のお話でした。

誤字・脱字等ありましたらご報告お願いします。

皆さまからのご感想を大募集しています。

というか感想貰えない日はめっちゃ落ち込むので、短くてもいいのでお書きくださると本当にうれしいです。

なんか催促してるようで申し訳ないです……

第十一話（前書き）

みなさんたくさんのご感想・評価ありがとうございます！
読者のみなさんあってこそこの小説です。

これからも応援よろしくお願いします！

第十一話

Side:紫

「あはっ」

「ッ！」

目の前の妖怪から放たれる膨大な妖気と心臓を鷲掴みされるかのよ
うな狂気に、私は一気に警戒度を上げる。

142

「おねーさん、妖怪なの？ お名前は？」

「……ええ、八雲紫……スキマ妖怪よ。ところで、あなたは一体
何者かしら……？」

「ぼく？ ぼくは九狼だよ！ 狼の妖怪！」

にここにこと無邪気な笑みで語る九狼。しかしその体から止めどなく溢れ出る狂気が肌に刺さる。

一つの体に二つの精神が存在する妖怪……それが目の前の人狼の正体、か。

「あなた……いや、正確には“あなたたち”の体は確かに死んだはずよ。一体どういう原理になっているのかしら？　まさか蓬莱の薬を飲んだってという訳でもないんでしょう？」

そう、確かにあの時、和真は死んだ。

死者が蘇るなんて世界の常識を覆すことなど出来うるはずもない。けれどそんな常識をあざ笑うかのように、目の前でその死んだはずの体をもう一つの人格が操っている。

「ほーらいのくすりってなに？　そんなものなくても、ぼくは……いや、ぼくたちは死なないよ。　　ぼくが死なせてあげないもの」

楽しげに声を上げて笑う九狼の言葉に、小さく眉を顰める。

“死なせない”とは、一体どういうことなのか。

彼の能力は【真を嘘にする程度 of 能力】のはず。

死と言う真実を嘘にした……？ いや、そんな馬鹿なことがあるわけがない。

この私ですら、生と死の境界を操ることなどできないのだから。

ふと見ると、九狼の乱入によって隙間から逃れた萃香が、彼の豹変振りに口を開けて呆けている。

きっとまだ理解できていないんでしょうね。今日の前に居るのは和真ではない、まったくの別人だということを。

「そんなことより、ぼくと一緒に遊ぼうよ！　ずっ〜と外に出れなかつたから、退屈してるんだ」

ぷくーっと頬を膨らませる九狼。

可愛らしい仕草だが、元の顔つきがいかついただけあって、精神と体が一致していないというなんともアンバランスな印象を受ける。

「……せつかくのお誘いだけど、お断りさせていただきませぬわ。早くそこに居る鬼のお姫様を連れて帰らなければなりませんもの」

視線を萃香へと向ける。

九狼もまたその視線を追い、萃香がそこに居たことを初めて気づいたようので、驚きの声を上げた。

「わあ！　君も妖怪？　その角かっこいいね〜」

「え？　あ、そうかい……？」

ぺたぺたと角を触る九狼。　その体から漏れる狂気に若干後ずさりながらも、萃香は苦笑いを浮かべる。

その体から感じられる狂気とは裏腹に、実は純粹なだけの妖怪なのかもしれない。萃香がそう思い、肩の力を抜こうとした、その瞬間。

何の前触れもなく、九狼は萃香の腹に蹴りを叩きこんだ。

「　　かはッ!！」

それと同時に萃香の肺の中の空気が一気に外に押し出され、呼吸ができなくなる。

20メートルは飛んだところで萃香の体は、重力の法則に従って背中から地面に叩きつけられた。

「ぐっ……っ……」

「わー、すっごく飛んだよー? すっごくすっごくいー!」

パチパチと満面の笑みで手を叩く九狼。

もの。
狂っている。これならばあの狂気の質も納得できるという

「次はドッチボールだよ！ うまく避けてね！」

九狼の手には、ボール大の大きさの妖弾が構えられている。

けれどその大きさに反比例するように、膨大な妖力がその弾に詰まっているのがひしひしと感じられる。

(まずいわね……)

アレを食らえば、いかに鬼と言えどもただでは済まないだろう。

今ここで伊吹萃香に死んでもらっては大いに困る。

かといって妖怪化した彼を私の実力で止めれるとは思わない。

私は一気に萃香との距離を詰め、彼女を抱きかかえる。

そして一瞬で前方に隙間を開け、脇目も振りずに飛び込んだ。

「ゆ、紫……？」

「怪我人は黙ってなさい……まったく、ついてないわね」

私の腕の中で痛み顔に顔を顰めながら、私の顔を見上げる萃香に苦笑する。

隙間を通過して目的の場所に行くというのは案外イメージ力を要する。なので少しイメージを纏める時間が必要になるが、今はそんなことを言っている場合ではない。

殺しても死ななかつたような奴だ。どんなイレギュラーが再び起こるか分からない。

まずは自分と、そして伊吹萃香の安全を確保することが最優先。

とにかく目的地はどこでもいい。まずはアイツとの距離さえ離せば問題はない。

そう考え、隙間の中を小走りで駆けていく。

とりあえずあの場所から200kmほど離れた場所に……

「見い〜つけた！」

「「ツツツ!!?!」」

隙間の中を走っていた私たちの前に現れたのは、白髪の妖怪。

国崎九狼だった。

ありえない。

あるうことが、目の前の妖怪はスキマの中に自力で入り込んできたのだ。

そんなことを出来る存在なんて今まで一度も見なかった。

当たり前だ。最強の妖怪である私の能力に干渉できる存在なんて、幻想郷をひっくり返したって出て来るわけがない。

それをこいつは、さも自分の家の玄関を潜るかのように侵入してきた。

私の背筋が、恐怖という感情を以ってして生まれて初めて凍った。

「……本当に、イレギュラーすぎるわよね」

第十一話（後書き）

感想お待ちしています。
ツイッターのフォローも待ってます。

第十二話（前書き）

平日ですが余裕がありましたので投稿。

急遽書き上げましたので至らぬ点があるかもしれませんが。

皆さまの応援のおかげで、この度PV36000 ユニーク5300を達成いたしました。

このような作品が皆さまに愛されているという事実には深く恐縮していますが、

何よりも応援してくださっているすべての読者の方に改めて深く感謝の意を述べさせていただきます。

本当にありがとうございます！

この物語の結末まで今しばらくお付き合いいただければ幸いです。

第十二話

「がはっ！！」

九狼の力によって紫の体が宙を舞い、スキマの中にある地面へと叩きつけられる。

もう何度攻撃を受けたか思い出せないほど、紫の体はダメージを負っていた。

スキマの中にまで乱入してきた九狼に、萃香をかばいながら戦闘を続けてきた紫だったが、時間が経つことに押されていった。

今では九狼の攻撃に抵抗すらできないほど消耗しており、九狼の完全なワンサイドゲームと化していた。

紫の右腕は本来では有り得ない方向にひしゃげ、見ているだけでも痛々しいほど青白く変色してしまっている。

けれど九狼は意にも介さない様子で、さらに紫へと追い打ちをかける。

苦しげに呻く紫の顔面に、思いつきり振りかぶった足で蹴りを叩きこむ。

グシャ、という耳を塞ぎたくなるような痛々しい音が無音のスキマ

の空間の中に響き渡り、九狼は歓喜の笑い声を上げる。

「紫っ！」

ようやく先ほど腹部に受けたダメージが回復し、戦線へと復帰する萃香。

狂気に満ちた笑みを浮かべる九狼へと一気に詰め寄り、弾幕を撃たせないように九狼の両手を掴み、二人は取っ組み合いの状態になる。

「和真！ 一体どうしちゃったのさ！？ 確かに紫は私たちの敵だった……でもここまでやるなんて、いつもの和真らしくないよ！」

相手の顔に唾をまき散らしながらも、必死に叫ぶ萃香。

「さっきから和真和真って……僕の名前は九狼だって言ってるでしょー！？」

自分の顔に降りかかる唾などお構いなしに、負けじと九狼も目の前の鬼に叫ぶ。

しかしながら、流石の九狼も筋力では鬼の怪力に勝てないのか、じりじりと後方へと押されていく。

「馬鹿力だけが取り柄のバカ妖怪に、僕が負ける訳ない！」

目の前の萃香を睨みつけながら、九狼は妖力をその身に纏わせる。

「なっ!?!」

九狼の妖力が一瞬跳ね上がったかと思うと、その体に変化が起こっていた。

白髪の中から生えるのは、萃香そっくりの二本の角。

鬼の誇りであり、絶対強者の証でもあるその角が、なぜ彼の頭に突如として出現したのか

しかし、彼に起こった変化はそれだけではない。

「ぐっ……!!」

先ほどまで力で押ししていたはずの萃香が、今度は逆に九狼に押されてしまっている。

九狼の体から漲る怪力に、拮抗していたはずの萃香の両腕が悲鳴を上げる。

「どかーん!!」

力負けした萃香の体が後ろにのけ反るや否や、九狼は勢いよく萃香の額に頭突きをかました。

「がっ……!!」

何れもの衝撃が萃香の体を襲い、背中から地面に叩きつけられると同時に目の前がチカチカと光るような感覚に襲われる。

「だから言ったでしょ。　僕が負けるはずないもの」

仰向けで横たわる萃香の首を掴み、軽々とその体を空中へと持ち上げる。

「かはっ……………か……………かず、ま……………」

喉を掴まれて苦しげな表情を浮かべながらも、萃香は必死に目の前に居る想い人へと声をかける。

そんな萃香の様子を、九狼は忌々しげに見つめる。

「……………そんなにあの作り物がいいのー？」

「作り物……………とか、お前が何を言っているのか、私には……………よく分からない……………。　だけど私は……………和真が、好き……………それだけさ……………！」

萃香の想いの詰まった叫びに、九狼の表情が歪む。

困惑から憎しみへ。　憎しみから悲しみへ。

「……………みんなそうだ。　みんな和真が好き。　パパもママもお爺ちゃんも、みんなみんな和真和真和真真って、僕のことなんて誰も見てくれない！！」

「が……はっ………」

癩癩を起した子供のように喚き散らす九狼。

それと同時に萃香の首に掛かる圧力が増す。

「……要らないよ。和真も、和真が好きな人たちも。みんな
らない、イラナイイラナイイラナイ！！ みんな消えちゃえ！！！！
！」

九狼の右腕に高濃度の妖弾が形成される。

それは目の前に広がる全ての風景を、塵一つ残さず消し去ってしま
うほどの暴力の化身・

首を掴まれて宙に浮いたままの萃香には、それを避ける術がない。

鬼の角が生えたことによつて筋力が増大した九狼の腕から逃れるこ
とは、消耗しきつた萃香には到底不可能なことであつた。

「くっ！ 萃香……！」

口から血を流して、美しかった頃の面影もないほど顔の形が歪んでしまっている紫が、それでも尚萃香を逃がそうと能力を発動しようとする。

しかし紫にも妖力は欠片も残っておらず、伸ばした腕の先にスキマが開かれることは 無い。

「ばいばい、鬼の妖怪さん。次は“僕のことを好きでいてね”」

振りかぶった右腕の先にある妖弾が、萃香の顔面を粉碎しようとする。

和真……もう一度だけ、一緒におしゃべりしたかったな。

瞳を閉じ、大切だった人のことを思い浮かべながら、萃香は逃れられない死を覚悟した。

.....

しかし、これは嘘つきな男の物語である。

世の中の理不尽に嘘をつき、森羅万象の理に嘘をつくことこそが彼の“誇り”。

故に、鬼の少女の死などという真実は認めない。認めるわけにはいかない。

そう、嘘つきな男にとっても、少女は大切な存在なのだから。

「
人の家族に何してやがるんだ？ 九狼」

聞き覚えのある声が萃香の耳に届く。

恐る恐る瞳を開けると、そこにあったのは目と鼻の先で止まる妖弾

を握りこんだ右腕。

そして、金色だった瞳が右目だけ、確かに黒色へと変貌していた。

黒色の瞳が映すのは愛おしいものを見るかのような優しげな色。

そう、それは間違いなく国崎和真のものであった。

「一体どこまで僕の邪魔をすれば気が済むのかな　和真」

憤怒の表情で顔を歪める九狼。

一つの口が、まるで大道芸でもしているかのように交互に別の声色を放つ。

「邪魔？　邪魔だと？　それならば言わせてもらおう。
お前の存在のほうがよくばど邪魔だ。　糞ったれが」

「散々僕を閉じ込めておきながら、ひどい言い草だね。勝手に人の体に乗っ取っておきながら、本来の体の持ち主に邪魔だと言いつつか……あまり調子に乗らないでよ、作り物の人格の分際で」

「例え作り物だろうと、俺は確かにここに存在している。結局のところ、作り物とオリジナルにほとんど差なんて生じないのさ……それは俺を作ったお前が一番よく知っているだろう？ 国崎九狼」

「憎たらしいほどよく分かっているよ。だからこそ、僕は僕という存在を賭して、君という存在を作ったのだからね。国崎和真」

二人は笑う。 ああ、なんと滑稽な話だろうか。

狂気に満ちて生れ落ちた少年は、その狂気故に実の肉親さえも彼を畏怖し、遠ざけた。

そこで彼は、他者から自分という存在を認めてもらうために作り物の自分を作った。

作られた少年は、本来の自分が過ごすはずだった時間を傀儡として生きてきた。

少年は傀儡に、ただの道具としての価値しか認めていなかった。

だけど傀儡は自我を持ち、更には自分の守るべきものを見つけた。

故に二人は対立する。

お互いに譲れないものがあるのだから。

これは決して正義か悪かの二択で論じられる問題ではない。

二人がその手に振りかざすものは、自分自身のためのただの我が儘なのだから。

「決着をつけよう。俺たちの、お互いの存在を賭けて」

嘘つきな男は告げる。

再び自分の大切な少女と共に生きる、幸せな日々を勝ち取るために。

「決着をつけようよ。僕たちの、どちらの我が儘を通すのかを」

狂気に染まった少年は告げる。

傀儡を殺し、今度こそ自分自身の生を、自分自身の足で歩んでいくために。

二人の体から力が抜け、ガクリと膝を着く。

暇が静かに落とされ、誰も知ることのできない、二人だけの決戦の場へと赴いた。

第十二話（後書き）

誤字・脱字等ございましたらご報告お願いいたします。
ご感想もどしどしお寄せください。

登場人物紹介（前書き）

Fate風ステータスです。

あくまで、参考程度にお考えください。

登場人物紹介

国崎 和真 (Kazuma Kunisaki)

種族：人間 / 妖狼

ステータス

筋力：D

耐久：E

敏捷：D++

妖力：A

幸運：B

能力：A+

設定

本編の主人公。

“親しい人から嫌われたくない”という願望によって国崎九狼が造った人格。

一族代々から受け継がれる、【嘘をつかなければならない程度の呪い】を身に宿し、真実を口にするたびに激痛が体を襲う。

黒髪黒眼の典型的な日本人の姿であるが、人相がとても悪い。

そのため初対面の人から怖がられてしまうこともしばしばある。

詐欺師を営んでいたため、表面上は人とコミュニケーションを取ることは苦手ではない。

しかし素の自分を表に出すことがなかなか無かったため、真正面から自分と向き合ってくる萃香に戸惑いと愛しさを感じている。

人間の体のため、妖怪と比べると力も無い上に打たれ弱い。

更には戦闘慣れしていないということもあって、本来出せるはずの実力をなかなか奮うことが出来ないでいる。

能力

【真を嘘まこと うそにする程度の能力】：A+

その名の通り、真実を嘘へと変えてしまう能力である。

弾幕といった物質がそこに在ったという真実を嘘へと変え、弾幕そのものをかき消すことが可能。

それ以外にも、妖力が在るといふ真実を嘘へと変えたりとさまざまに用途が存在する。

呪い

【嘘をつかなければならない程度の呪い】：？

大妖怪にも劣らない和真の妖力を以ってしても打ち消すことのできない凶悪な呪い。

大昔に先祖が呪いつきの少年を喰らったことにより、その身に少年と同じ呪いを宿した。

伊吹 萃香
(S u i k a I b u k i)

種族：鬼

ステータス

筋力：A+

耐久：B++

敏捷：B

妖力：A

幸運：D

能力：A+

設定

突然幻想郷の外にある和真が住んでいるマンションの一室に姿を現した鬼の妖怪。

小学低学年にしか思えない容姿をしているが、何百年もの齢を重ねた大妖怪である。

頭には長くねじれた2本の角が生えている。

「伊吹瓢」という瓢箪を持っており、この瓢箪は酒虫という少量の水を多量の酒に変える生物の体液が塗布されていることによって酒が無限に沸き出るようになっている。

地上の人間に絶望して他の鬼たちと共に地底へと潜ったが、暇つぶしに幻想郷で異変を起こす。

その際、博麗の巫女やその仲間たちによって退治され、その後は博麗神社でのんびりと過ごす生活を送っていた。

今ではその生活よりも和真と共に生きることが望んでいるらしいが、やはり酒は好きらしい。

能力

【密と疎を操る程度の能力】：A+

あらゆるものの密度を自在に操る能力である。物質の密度を高めればそれは高熱を帯び、逆に密度を下げれば物質は霧状になる。

体を霧状にすることも可能で、このとき相手は全く手出し出来ない状態になり、一方的に戦う事が可能となるが、本人曰く戦闘においてその使い方は卑怯とのこと。

国崎 九狼 (Kuro Kunisaki)

種族：天狼

ステータス

筋力：B

耐久：D++

敏捷：C

妖力：A+

幸運：D

能力：A++

設定

生れ落ちた時から狂気に満ち溢れた忌み子。

肉親からも畏怖され、壊れそうになった自分の精神を守るために国崎和真という人格を作り、自分は心の奥に閉じこもった。

そのため精神年齢は幼い子供と一緒くらいである。

和真が一度死んだことよって再びその人格を現し、消耗しているとはいえ八雲紫と伊吹萃香の二人を圧倒した。

能力

【嘘を真うそまことにする程度の能力】：A++

本編ではスキマの中を逃走する紫と萃香を追いかけるために、“自分もスキマに入れる”という嘘をついた。

更には伊吹萃香に力負けしそうになった際、この能力を使って“自分も鬼である”という嘘を真に変え、筋力を増大させた。

以上のことから分かる通り、ある一定の制限を除いて、ほとんどの事象を無から有へと具現化する恐ろしい能力である。

第十三話（前書き）

急ピッチで仕上げました！
遅くなり申し訳ありません！><

第十三話

白と黒の弾幕が辺り一面に広がり、互いにぶつかり合って爆発しながら消滅する。

膨大なエネルギーを秘めた弾幕同士の爆発の威力は恐ろしいものであった。

爆発による熱風の嵐の中を疾走する二つの影があった。

途切れることなく弾幕を放ちながら、距離が縮まれば肉弾戦へと移行する。

拮抗した勝負に思われたが、徐々に黒色の人影のほうを押され始めていた。

「くっ……！」

黒色のスーツ服を纏った青年が苦しげに声を漏らす。

人狼　国崎和真は、不利な状況にあっても尚、その闘志を失うことは無く目の前の相手を睨みつけている。

「あははははは！」

和真に対峙する白のスーツ服を纏った白髪の少年は狂った笑い声を上げながら白色の弾幕を放ち続ける。

天狼　国崎九狼は、ただただ目の前の弱者を蹂躪することしか考えていない。

当然だ。そもそもそれ以外に考える必要がないのだから。

「この……野郎があ！」

和真は自分に迫りくる弾幕を己が能力を以って消滅させる。

そしてすぐに九狼との距離を詰めようと足に力を入れるが、先ほどまでそこに居たはずの九狼の姿はそこにはなかった。

「なっ……!？」

「どこ見てるのさ」

一瞬で和真の背後へと移動していた九狼が、にやりと口元を歪める。まったく以って無防備な状況。人間の体の和真が一度でも攻撃を喰らえばその時点でゲームセットになるのは間違いないだろう。九狼は自分の勝利を確信し、大きく勢いをつけた回し蹴りを和真の体へと放った。

いきなり背後から放たれた強烈な蹴りで和真の体が吹き飛ばされるはずだった。

しかし咄嗟に発動した和真の能力により九狼の不意打ちは失敗し、勢いを殺しきれなかった九狼の体は大きくバランスを崩した。和真の体が蜃気楼のように霞へと変わり、空気中へと霧散していった。

「お前の攻撃は“当たらない”」

「ッ!？」

足元から聞こえてきた和真の声に息を飲む。見ると、腰を低く落とした体勢でしゃがみ込み、拳を握りしめる和真の姿が在った。

「まずは……一発だ!」

勢いよく跳躍し、九狼の顔面めがけて拳を振るう。

九狼が超人的な反射神経で咄嗟に両腕を顔の前で交差させガードするが、当たり所が悪かったのか、ガードした右腕から骨が折れる音がはつきりと九狼の耳に届く。

「死ねっ……!!」

痛みに顔を顰めながらも、咄嗟に左手から放った弾幕が和真の命を奪おうと迫る。

しかしその弾幕も、和真の能力によって無効化される……はずであった。

「何度も同じ手が通用すると思うな!!」

九狼の能力によって、和真の能力で消滅しかかっていた弾幕が再びその力を取り戻す。

弾幕という存在が和真によって“嘘”へと変えられ、更にその事実を上書きするかのようになり九狼によって“真”へと変えられる。

つまりは　　今和真の目の前にある弾幕は、和真の命を容易く奪ってしまうシロモノだということだ。

「くそ……!!」

力いっぱい体を動かし、なんとか迫りくる弾幕の軌道から自分の体を回避させようとした和真だったが、

直撃こそ避けたものの、左肩に掠った弾幕によってその部分に大火傷を負う。

「があっ……!!」

脳を揺さぶられるような激痛に目の前がチカチカと光るが、唇を噛みしめてどうにか意識を失わないように努める。もはや使い物になりそうにない左腕に早々に見切りをつけ、右拳を握りしめながら九狼に向かって駆ける。

「来い、和真！ お前の物語に幕引きをしてやろう！」

「抜かせこの引きこもり野郎が。俺の物語はここから始める……お前の都合で勝手に終わらせてやりなんかしない！」

白と黒の妖力の塊が真正面から衝突し、辺りは眩い光に包まれた。

.....

あれからどのくらいの時間が経っただろうか。

和真はもちろんのこと、あらゆる面で和真に勝っているはずの九狼でさえも、わずかな妖力すら残っていなかった。

決して九狼が油断していたというわけではないのに彼がここまで苦戦を強いられているというのは、和真の願う渴望が彼のそれを上回っていたからに他ならない。

肉親からも拒絶され、一度は深い奈落の底にその身を落としたが、

今度こそ己が人生を他ならぬ自分の足で歩みたいという九狼の渴望。そして永い年月を嘘をつき続けることに費やした嘘つきの男が、ようやく出会った心のそこから守りたいと思える少女とのまだ見ぬ毎日願う和真の渴望。

二つの渴望が真正面から衝突し、そして今なおその決着はつくことを知らない。

それは至極当たり前のことであろう。その渴望は二人にとってすでに自分にとってのアイデンティティというものに他ならないのだから。

和真は静かに、そしてはっきりと目の前に対峙する己の壁……もう一人の自分を見据える。

その目に映る九狼からは、満身創痍の身でありながらも未だに覇気というものが消えてはいない。計らずとも、自分も同じように映っているのであるが。

左腕はもはや使い物にはならないことは重々承知の上である。また、なんとか動かせる右腕に至ってもうまく力を込めることはできなくなっていた。

……しかし、それが何だというのだ。

動かせないならば動かせるようにすればいい。力が入らないのなら

ば無理やりにでも込めてやればいい。

不条理？理不尽？そんなものは既に 食い飽きている。

今自分が求めているのはそんな陳腐な味ではなく、愛しい鬼の少女とのまだ見ぬ輝かしい日常でこそ得られる暖かな味なのだから。

故に勝利を。この貧弱な人間の身に堕ちた嘔吐きの男に女神の祝福を。

嘔つきは駆ける。自分と対峙する敵に向かって？いいや、違っただろ。そんなものは彼の 眼中にはない。

彼が目指すのは、自分を待つ小さな鬼の少女の居る場所のみ。

その道の途中で自分を阻む邪魔な壁を粉碎するためだけに嘔吐きな男は拳を振るう。

この刹那に、自分に残されたすべての力を拳に乗せて

この戦いはここに、幕を下ろした。

第十三話（後書き）

次辺りで第一章エピローグかと思われます。

エピソード（前書き）

思えば遠くまで来たものだ、今更になって思います。

ついに、ついに……第一章エピソードです！

みなさまに応援され続けて、ここまで頑張つて来れました！

お気に入りも100件突破しました！

本当にありがとうございます！！

エピソード

side:和真

荒い息をどうにか落ち着かせながら、今目の前で仰向けに横たわる九郎の体を見やる。

すでにその存在を維持する力も失われ始めているのだろう。光の粒子が体から漏れ始め、少しずつ透明になっていく。

俺が放った拳は、何にも遮られることなく九狼の顔面に見事にヒットした。

俺に残された力のすべてを乗せた一撃とはいえ、所詮は人間の貧弱な拳一つ、妖怪である九狼にとっては避けることなど容易かっただろう。

それなのにこいつは、拳を避ける動作など一切見せずにただ目をしっかりと見開いたまま俺の拳をその体で受けた。

「どうして、避けなかった」

消え入るような声で、呟く。

分からない。

どうしてこいつはそんな馬鹿な真似をやってのけたのだろう。

この一撃を喰らえばいかに九狼とはいえ、致命傷となることは分かっていたはずなのに。

その身に宿す渴望は何物にも代えられないはずなのに、九狼は憎たらしい表情の一つも見せずに無表情で真つ白な空間を見上げている。

「僕にもよく分からないよ。 …でも、避けたらいけないような気がしたんだ」

「……ふざけてるのか？ お前は生きたかったはずだ。俺という存在を消して、体を取り戻す必要があったはずだろう…なんで自分の身を滅ぼすような真似を」

「確かに、僕は生きたかった。二度と謳歌できないと思って諦めていた人生が、君が死んだことによって手の届くものになった。そんなチャンス逃すと思っていたのかい？」

「だからッ！ それならばなぜ」でもそれは所詮僕だけの願いなんだよ「……なにを、言っている？」

「これは僕と和真の我が儘のぶつかり合いだった。 自分の我が儘

のためにもう一人の自分をその手で消す……そのために僕らは戦っていた。いや、そう勘違いしていたんだ」

「勘違い……だと？」

呆けた表情の俺を見て、九狼は小さく喉を鳴らす。

実に愉快だ、実に滑稽だと。でもそれは相手を侮辱する言葉ではなかった。

それは、この結末が訪れたことに対する喜びの言葉。

「君の願いは、君だけのものじゃなかったんだよ」

そう、和真の願いは萃香と共に生きること
それは即ち、萃香にとつての願いでもある。

己一人のちっぽけな渴望が、幸福な毎日をただ無垢なまでに願う一人分の渴望に叶うはずがなかったのだ。

九狼は見てしまったのだ。拳を唸らせて迫る和真の背後に、彼を慕う鬼の少女の影を。

「正直、君たちが羨ましい。互いに愛し愛され、互いを信じ合う君たちの関係というものは僕が嫉妬して止まないものだ」

「それなら、なおさら」

「君は、僕だ。もう一人の僕自身だ。なればこそ、君の幸福は僕自身の幸福でもある。……そのことにようやく気が付けた。だから、もう思い残すことはないよ」

そう言って九狼は、いつもの狂気に満ちた笑みではなく
相応の、純粹な笑みを浮かべた。

年

九狼の体から漏れ出した光の粒子が宙へと溶けていく。

九狼に残された時間は、もう幾何もないだろう。

「ああ、でもやっぱり、死ぬのは怖いな。ねえ和真……僕は何のために生まれてきたのかな」

その問いに答えるべき言葉を、俺は持っていない。

いや、持ってはいけないのだ。

本当は言っただけ。お前には生まれてきた理由がちゃんとあった。

お前のおかげで俺は今ここにいます。お前のおかげで翠香と出会うことが出来た、と。

けれど　目の前で消えつつあるこの少年の人生そのものを、嘘つきの男の口から放たれた下品な言葉で汚してはいけません。

「さあ。自分で考えたかどうか？　生憎、こちらガキのお守りは一人で精いっぱいなんだ。お前のことまで構ってられねえよ」

吐き捨てるように言った俺の言葉に、九狼はそれでも満足そうに頷く。

「そっか、そうだね。ふふっ……君のその無愛想な部分は僕も気に入ってるけど、彼女にもそんな態度ばかり取ってたら、いつか嫌われちゃうよ？」

「うっせーよ。引きこもりのガキにまで心配されるほど落ちぶれちゃいねえさ」

「あははは！ 人付き合いが何よりも苦手なコミュ力不足の社会不適合者には言われたくないなあ」

互いに軽く毒づきながら、笑いあう。

思えば生まれてからこの方、誰よりも近い位置に居た二人だということに、こつやつて話すことなどめったに無かった。

狂気に満ちていた少年は思う。

どうして気づかなかつたのだろう。自分を愛してくれる存在が、こんなにも近くに居たのに、と。

「そろそろ、お別れだね」

「……ああ。後は俺に任せて、ゆっくり休んでくれ」

「これまでも君にずっと任せっきりだったけどね。 さて、君と鬼の少女の物語には無粋な輩は必要ないみたいだ。 よって消えよう、僕たちを戒め続けてきた呪いと共に」

九狼の体がより一層の輝きを放つ。

その身に残されたすべての力と、わずかに残った自分という存在を媒体にし、呪いを断ち切る。

自分が認めた二人の未来に、いけ好かない不純物など残してやるものか。

それは忘却の彼方へと葬り去られたはずの天狼としての誇り。

遙か昔から、神の使いとして数多の魔をその牙で断罪してきた、正義の心。

その輝きはこの世のものとは思えないほどに神々しくて、和真の目には、それが天使の翼のように映った。

「またね、和真」

「……ああ、またな」

光に包まれた九狼の体が、宙へと霧散して、消えた。

.....

暖かな温もりに包まれながら、ゆっくりと瞼を開く。

まず初めに目に映ったのは、涙で目を真っ赤に腫らした愛しい少女の顔。

身長差があるはずの自分が、何故か自分より背の低い少女を見上げているという状況と、後頭部に柔らかな感触を感じて、彼女に膝枕をされていたのだと理解する。

どう声をかけようか　微かな時間、頭の中で考えてみたものの、改めて自分らしくないと内心で小さく苦笑する。

もうこの少女に嘘をつく必要などないのだ、だから今は

「おかえりっ、和真！」

「…ただいま、萃香」

彼女の笑みに、自分も満面の笑みを以って応えることにしようではないか。

「こほん……そろそろいいかしら？」

しばらくの間見つめ合っていた俺たちに、気まずそうにかけられた声に二人して慌てて立ちあがって振り返る。

そこには、先日遊園地で会った藍と名乗る女性に肩を支えられている紫の姿が在った。

俺と九狼が精神世界へ潜る直前に見た彼女の有様は、なんともひどいものだったが、腫れ上がっていたはずの顔は以前と変わらぬ美しいものに戻っており、ひしゃげていた腕も元通りになっていた。おそらく駆けつけてきた藍に治癒してもらったのだろう。

すでに傷は見当たらないが、体力はそれなりに消費しているようである。一人では立てないようだった。

それでも俺を一度死へと追いやった紫の能力は危険だ。

体を半歩前に出し、応戦の構えを取る。

「ちょっと待ちなさい！ 流石にもう戦うつもりなんてないわよ！」

すると紫は慌てたように手を顔の前ではたはたと振り、敵対の意が自分には無いことを伝える。

「……信用できないな。例えお前にはなくても、横に居るキツネ耳生やしたねーちゃんは無茶苦茶ガン飛ばしてきてるんだが」

そう、俺が目を覚ました時からずっと藍から親の仇のように睨まれていた。

……まあ主人がこんな目にあっただ。恨まない方がどうかしてるだろう。

「……はあ。 藍、あなたの気持ちは嬉しいけど、ここは抑えなさい」

「ですが紫様!？」

「聞えなかったかしら？ 私は抑えろと言ったのよ」

「ッ……！ 申し訳、ありません……っ」

渋々といった表情で引き下がる藍。

紫は小さくため息をついて、再び俺たちに目を向けた。

「私の式が失礼しましたわ。 それで、あなたに話があるのだけけれど」

「……生憎と、こちらは話すことなんて何もないんだがな」

「まあそう仰らずに。何事にも寛容な器の大きさがないと、その程度の男だと思われるわよ?」

…こいつは人をおちよくっているのだろうか。

本当に話を聞かずに帰ろうか、と思ったものの、今現在スキマの中に居る俺たちがここから出る術はない。

…九狼なら小指一本で家までの道を開けるだろうか。

「あまり時間もないし、率直に言いますわ。国崎和真、幻想郷へ来る気はないかしら?」

「……なに?」

紫から告げられた言葉にしばし思考する。

別に元の世界に未練があるというわけではない。詐欺師は廃業したし、そもそもやる必要もなくなった。

それに萃香と一緒にならば、別にどこでも暮らしていける。

……我ながら信じられないほど萃香に依存してしまっているな。

何ともいえない表情で眉を潜める俺を見て、コクンと小首を傾げて「どうしたの？」と尋ねる萃香。

嘘はつかないと決めたが、こんなことを正直に言ってしまうえば俺の中の大事な何かが壊れてしまう。

「なんでもねえよ」と小声で返事をし、改めて紫に向き直る。

「一体どういう風の吹き回しなんだ？ さっきまでは俺を殺そうとしてきた奴が、今度は自分の住む場所に誘おうだなんて、頭狂っているようにしか思えねえよ」

「……こちらにも色々と事情があったのよ。でも戦ってみて確信したわ。あなたの力はこれからの幻想郷にとって必要不可欠なものであるとね」

さて、どうしようか。

萃香にとっては何のデメリットもない話だ。元居た場所に帰るだけなのだし、俺の世界に居るよりも同じ妖怪が居る幻想郷に居たほうが気が楽だろう。

俺にとつても同じ。何度も同じことを言うつようだが、萃香さえ居ればどこでも構わない。

通帳に入れていた財産も、元はと言えば詐欺で稼いだ汚い金だ。そんなものでこれから飯を食っていこうとは到底思えない。

「萃香は、どう思うっ？」

だから俺は、自分の隣で話を聞いていた萃香に決断を委ねることにした。

「……和真も一緒なら、私は帰りたいな。仲のいい奴らも居たし、和真のことも紹介したいからね！」

そう言つて手をぎゅっと握りしめてくる萃香。

この手の平から伝わる体温を、今度こそ手放さないと誓おう。

九狼からも散々お膳立てされたんだ。ここで行かなきゃ男が廃る。

「……行こう、幻想郷に。萃香がそれを望むのなら」

しっかりと紫の目を見据えて告げる。

「ふふっ、ようこそ幻想郷へ。 幻想郷は全てを受け入れますわ」

上品に口元を手で押さえながら、小さく笑う紫。

そして俺たちの背後に、ちょうど一人分通り抜けられそうなスキマが開く。

このスキマの先にある世界で、俺たちの新しい生活が始まるのだ。

そう思うと、年甲斐もなく妙にテンションが上がってくるのを感じた。

萃香の手をしっかりと繋ぎ直し、小さく一步を踏み出す。

萃香の歩幅に合わせて、ゆっくりと、けれど確実に。

俺たちは、幻想の世界へと足を踏み入れた。

s i d e : 紫

「……本当によかったのですか？ 紫様」

私の式からかけられた声に、肯定の意を以って応える。

「もちろんよ。あの男からの情報も、案外捨てたものじゃなかった
ってことね」

そう、伊吹萃香が幻想郷から消えたあの日。

私はある男に、伊吹萃香の居場所と、彼女と共に居るであろう男の情報を受け取ったのだ。

なんとも胡散臭い男ではあったものの、彼に纏わる逸話は嫌というほど聞いている。

大昔から存在する大妖怪の内の一柱。

その中でも抜きんでた力を誇る最強の中の最強。

その筋からの情報だ、無下にするわけにもいくまい。

「けれど、今この時期に新たな外来人を幻想郷へ呼び込むのは紫様も反対なさっていたはずでは……」

そう、それが国崎和真を殺そうとした一番の理由。

今幻想郷は、侵略を受けている。

比喻でもなんでもなく、そのままの意味だ。

創立以来、外敵からの攻撃を一度も受けたことのなかった幻想郷が今、未曾有の危機を迎えている。

幻想郷を覆っていた博麗大結界の一部が破壊され、そこから外敵の侵入を許している。

現状では私と藍の2人でなんとか対処できているけれど、それも限界が近い。

いずれ幻想郷中の戦力を集めて全面戦争をしなければならなくなるでしょうね。

故に今、素性の知れない……しかも能力持ちという外来人を何があつても幻想郷に入れないつもりでいた。

そいつが今回の幻想郷侵略にどんな繋がりを持っているのか分からないからだ。

けれど

「彼が伊吹萃香のこと以外目にないつてことは、戦ってみてよく理解できたわ。ならばその甘さを、今は利用させてもらうことにしましょう。……戦力は、少しでも欲しいもの」

そう、彼は伊吹萃香と共に生きることが望んでいた。

それこそ幻想郷でなくとも構わない。彼が元居た世界でも構わなかったのだ。

そこから考えうるに、彼が今回の異変に関わっている可能性は零に等しい。

「……………ここからが、正念場ね」

眉を潜めながら、ぼつりと呟く。

私の愛しい幻想を守るためならば、この身がどうなるかと構わない。

けれど今回の相手は、未だにその実態を明かさないう未知の敵

ただ、博麗大結界を破ったことから想像を絶する強さを誇っているであろうことは容易く理解できる。

正直、私と藍が二人で戦っても勝てるかどうか分からない。

なればこそ、使える駒は全て使いましょう。

全ては、私の愛する我が子たちのために

エピソード（後書き）

次回からは幻想郷編です。

更新までに時間が空いてしまうかもしれませんが、ご容赦ください。
ご意見・ご感想お待ちしております！

幕間：幻想に忍び寄る魔の手（前書き）

更新遅くなりました。すみません。

お気に入りが入りが1111件突破しました。

わお、ピンゾロですね。

幕間：幻想に忍び寄る魔の手

幻想と現実の狭間にある誰も知らない空間に、ひっそりと佇む大きな屋敷。

西洋屋敷のような外見をしているそれは、美しくありながらも何人たりとも寄せ付けない威圧感を漂わせていた。

その屋敷の一室……いや、ホールと言うべきか。高い天井には豪華なシャンデリアが飾られているが、ところどころに蜘蛛の糸が張っており、それが長年手入れされていないことが分かる。

暗闇に包まれたホールを照らす明かりは、窓から差し込む月明かりと、申し訳程度に設置されたロウソクから漏れる淡い光だけだった。

百人は裕に入れそうなホールだが、そこにある人影はたったの四つのみ。

しかしその四人の一人一人が万の軍勢にも勝るほどの膨大な妖力を持つ猛者たちであることは、並みの妖怪でも理解できるだろう。

古ぼけた黒いローブに身を包み、長く伸ばした黒髪に目の下にある隈がなんとも不健康さを漂わせている少女が、小さく口を開く。

「……博麗結界の一部を破壊することに成功。私の兵たちを少数送り込んだものの、八雲紫によって全て撃破された模様」

淡々と告げたかに見えた少女だったが、その声色に含まれている感情は微かな怒り。

自分の愛すべき兵たちを、下種な妖怪如きに葬り去られたことによる遺憾の念。

そんな少女の様子を感じ取ったのか、奇抜な服装をした金色の髪を逆立てた長身の青年が割り込む。

「けっ、まあ仕方ないさ。腐ってもスキマ妖怪…最強の妖怪と畏怖され続けてきた存在だ。お前の人形如きじゃ、せいぜいスタミナを浪費させるのが精いっぱいってところだろうよ」

「……喧嘩売ってるなら、買う」

静かに睨みつける黒髪の少女に、金髪の青年は嘲笑で返す。

「おいおい、冗談はよせよ。戦闘能力だけで見ればお前はこの中じゃ最弱だ。無駄に命を散らすだけだぜ？」

「……やってみないと分からない」

少女がその身に妖気を宿らせる。何らかの能力を発動しようとする
合図であろう。

それに気付いた青年もまた、両の掌に妖力を集中させる。

この二人から漏れる妖気は尋常なものではない。

ここで戦闘が始まってしまえば、この屋敷はいとも容易く崩壊して
しまつたろう。

今ここに、絶対強者の二人による決闘が始まるうとした、その時

「お二方、そこまでござる。今は御前でござるぞ、控
えられよ」

一触即発の雰囲気、和服のようなものに身を包み黒髪を後頭部で
纏めた、いかにも侍といった風貌の男が制す。

腰に添えられた二本の日本刀からは、尋常ではない妖気と濃厚な血
の匂い。

そして獲物を決して逃がさない鷹のような目つきからも、この男が
かなりの兵であることが伺える。

「なんだ武蔵？ 邪魔するっていうなら、お前であっても容赦しねーぜ」

「……別に私は武蔵がどうなるうとどうでもいい。あの人さえ居れば、私は……」

対峙していた二人から、濃密度の殺気をぶつけられる。

並みの人間ならそれだけで心臓発作を起こしそうなものだが、武蔵と呼ばれた侍風の男はそよ風でも浴びるように表情を微塵も変えない。

「実力行使も止む無しでござるな。致し方ない……少し眠っていたいただきますよう」

武蔵が腰に添えられた二本の刀に手を伸ばし、その刀身を鞘から抜き出そうとしたその時、低い男の声がホールに響き渡った。

「なにをしている…絆、時臣、武蔵。仲間内で争っている場合ではないだろう」

その声が届いた時、三人の背筋に冷たいものが走る。

そして自分の意志とは無関係に自然と震えだす体を、それでも益荒男としての意地で押さえながら、彼らの主へと頭を垂れる。

彼ら三人は決して弱い存在ではない。

一騎当千、一人一人が万の軍勢にも勝る……本物の怪物たち。

その彼らが忠誠を誓う人物こそが、この屋敷の主。

「申し訳ございませぬ、我が主。拙者、この馬鹿者共がいざござを始めた為、鎮圧しようとしていた次第にござる」

武蔵は頭を深く下げたまま、目の前の主から発せられるこの場にいる全員とも比べ物にならないほどの威圧感を堪える。

「その話は本当か？」

武蔵から視線を外し、頭を垂れる二人へと目を向ける。

「……私の兵を、侮辱されたので」

「俺は使えない物を使えないと言っただけっすよ、主」

言葉こそ発しているものの、絆と時臣の二人の額には大粒の汗がにじみ出ている。

もう数えるのも億劫になるほどの年月をこの方と一緒に歩いているというのに　　ああ、勝てない。どう足掻いてもこの方には絶対に勝てないと、本能から理解してしまう。

「　　面を上げる」

その言葉に、さっと顔を上げる三人。

そして今一度自分たちの主の顔をしかとその胸に焼き付ける。

血に染まったような真紅の髪。もう長く散髪などしていないのか、伸びきった髪は肩まで届き、前髪はその顔のほぼ全てを覆い隠してしまっている。

しかしながらその髪の間から時折見える肌は、古来より忌み嫌われた異民族と同じ褐色の肌。

更には、見る者すべてを畏怖させる黄金の瞳。

そしてその身に纏うのは、もう本来どんな服であったかもわからないほどボロボロになった黒い布きれ。

まるで浮浪者のそんな風貌だが、この男には益荒男たちを屈服させる確かな力がある。

三人から主と呼ばれた男は、このホールに集った三人の顔をさっと見渡し、さまざまな感情が籠っているであろう声で呟いた。

「とうとう、この時が来た」

瞼を静かに瞑り、男は己が人生を振り返る。

永かった。本当に。

いったいこの日のためにどれだけの血を我が身に浴び、どれだけの者たちの命を踏みにじってきただろう。

だが、全ては“彼女”のために。

「これより、幻想郷を

征服する」

絆はその瞳に熱き炎を燃やす。

自分が全てを捧げた主のために、この身が朽ちても主の願いを叶えたい。

遙か邪馬台国の時代から孤独だった少女は、その“絆”を決して手放さないと誓う。

時臣はその身を歓喜で震わせる。

ようやく自分の全力を出すことのできる機会がやってきたのだ。

数多の時代を旅してきた青年は、ようやく自分が歩むことの出来る“時”を見つけた。

武蔵は両脇の刀の鞘をそつと撫でる。

人間だった自分が、惨めに死ぬはずだった運命を変えてくれた我が主。

我が刀を、我が命を、全て主に捧げよう。

そして、男……『血濡れ』は、愛する“彼女”の元へ

「幻想の里には数多の血が流れることになるだろう。しかし、これは決して侵略という名の悪の行為ではない……“彼女”のための、聖戦だ」

そう、全ては“彼女”のための戦である。

女神の楽園に蔓延る塵芥共を駆逐するのが我らの役目。

さあ、穢れに満ちた土地を、そこに住まう虫どもの血で洗い流そう。

今ここに、天下無双の獣たちが開戦の雄叫びを上げた。

幕間・幻想に忍び寄る魔の手（後書き）

ご意見・ご感想おきかせください。

プロローグ（前書き）

やっと書きたかった日常編が書けた！
これからはばらくのーんびり進みます。

プロローグ

少女の細く美しい指が、獲物の腹の中を蹂躪する。

その手が獲物の血で真っ赤に染まっているが、少女は気にした様子もなく、それどころかどこか愉しげな笑みまで浮かべている。

そして少女は、獲物の腹から臓物を一気に引っ張りだし、明かりの下へとそれを晒す。

獲物は抵抗する素振りさえ見せない。当然だ。彼はもうすでに事切れてしまっているのだから。

少女は淡々と臓物を引きずり出す作業に没頭する。紅色の臓物が光を反射し、淡い光を醸し出していた。

幼さが残る少女が臓物でその手を汚していく光景は猟奇的で、それでいて何かの儀式のような神聖さを醸し出していた。

躊躇する素振りなど一切見せずに、どんどん獲物の臓物が明かりの元へと晒されていく。

少女の手が、止まる。

取り出すべき臓物が切れたのだ。

獲物の腹の中に臓物が残っていないことが分かると、少女は嬉々とした表情で声を上げるのだった。

「和真ー！ 魚の内臓全部取ったよー！」

花柄のエプロンを着た鬼の少女が、居間で茶をすすっていた男に声をかけた。

「……ん。 怪我とかしなかったか？」

「もう何回包丁握ってると思ってるのさ。 このくらい朝飯前だよ」

「指が絆創膏だらけのくせによく言っな」

あはは、と苦笑いを浮かべる鬼の少女 伊吹萃香の指には、大量の絆創膏が貼られていた。

そんな萃香の様子を見て、人間……いや、人狼の男 国崎和真はやれやれと小さくため息をつく。

萃香と和真が幻想郷へやって来てから、すでに1ヶ月の月日が流れていた。

人里に小さな家を借り、二人で生活をしている。

初めは妖怪の山にある萃香の家に住もうという話だったのだが、あのスキマ妖怪がご丁寧にも人里に家を準備してくれていたので、せっかくの好意を無下にするわけにもいかず、渋る萃香をなんとか宥めて人里で生活を送っているわけである。

とまあはじめの頃は色々とハプニングがあったものの、住めば都と言つように人里に暮らす村人たちは余所者である和真と、畏怖すべき妖怪であるはずの萃香の二人に親しみを持って接してくれていた。萃香については前から博霊の巫女と友人関係にあったという事実を村人の多くが知っており、恐ろしい鬼というよりも可愛い少女という印象のほうが強かったらしい。

半妖の和真に至っては、村に慧音……ワハクタクの女性という前例があったためか、何の御咎めもなしに人里に住むことに許可が出た。

慧音には人里に住むにあたって様々なことでお世話になったので、今では二人して頭が上がらない。

自分よりも遙か上位に存在するはずの萃香から頭を下げられていた

時の慧音は、見てるこちらが心配になるほどの慌て様だった。

それはさて置き。

人里に住み始めてから数日もしないうちに、萃香が自分が朝食を作りたいと言い出した。

和真も、萃香に家事を教える良い機会だと結論付け、二つ返事で了承したのだが…

この少女、とてつもなく不器用であった。

包丁を握れば食材ではなく自らの指を切りつけ、ようやくのことで切り終えた食材をフライパン？なにそれおいしいの？の要領で火に

直接放り込む。

これには流石に和真が待ったを掛け、急遽和真のパーフェクトお料理教室が開かれることになったのは記憶に新しい。

今ではようやく一人で台所を任せることができるようになったものの、時折聞こえてくる料理とはまったく関係がないであろう破壊音に、和真の胃はストレスで悲鳴をあげ始めていた。

「今からお魚さん焼くから、もう少し待っててね」

「あ、ああ……。萃香、飯の味はこの際気にしないから、なるべく安全に頼むぞ」

「え？料理するだけなのに危ないことなんて何も無いよ？ 変な和真だねー」

ここにこと笑う萃香の様子からは、確かに何の心配もないように伺える。

しかし今こうして萃香と会話している最中にも絶え間なく聞こえてくる破裂音に、和真は自分の顔がひきつるのを感じていた。

その後しばらくして、居間にあるちゃぶ台の上には食欲をそそられる良い香りを発する今が旬の焼き魚と、近所の村人から分けてもらった野菜を使った漬物に、湯気を上げる味噌汁に白ご飯と日本人らしい朝食が並んでいた。

和真が恐る恐る焼き魚に箸を伸ばしてその白い身を口に運ぶと、そのとたん溢れ出す脂と仄かな甘みが口の中に広がる。

(味は申し分ないのだが……)

目の前に並ぶ料理の数々が、あの轟音の中で作られたものであることを誰が理解出来るだろうか。

「えっと……その………美味しく、なかった？ ごめんね、私って和真と違って料理下手っぴだから……無理して食べてくれなくてもいいんだよ」

難しい顔をして目の前の焼き魚を睨み付けるようにして見つめる和真を見て、萃香は不安そうに顔を俯かせる。

「いや、旨い。旨いぞ、お世辞じゃないからな」

慌てて箸を動かし、目にもとまらぬ速さでどんどん料理を口に運んでいく。

そして未だ不安そうな顔をしている萃香に向けて微笑みかけると、萃香はようやくやくほっとしたように息を吐き、自分も料理に箸を伸ばし始めた。

「萃香、ご飯粒ついてるぞ」

「へっどいどいっ？ ……むー、和真、取って」

「……………ほらよ」

「えへへへ」

「……………へらへらせずになっさと食べ糞ガキ」

朝食の後片付けが終わると、和真は寝間着からスーツへと着替える。

そしてその上から　猫さん模様のエプロンを着用した。

別に今から更に何かを作って食べようとしているわけではない。

エプロン姿の和真は居間を出ると、古ぼけた廊下を進む。

随分前に建てられた家だったのだろう。歩を進めるたびにギシギシと床の板が音をたてる。

住み始めたころは床が抜け落ちてしまうのではないかと気になっていたが、1ヶ月も住んでいれば流石に慣れてくる。

今では足に合わせてリズムカルに鳴り響くこの音に、和真は妙な愛着まで湧いていた。

そのまま歩みを進めると、一際大きな部屋へと到着する。

外の明かりを一切閉ざしているためか、その部屋の中は真つ暗闇に包まれていた。

暗がりの中を手探りで進み、目的のスイッチを押す。

すると瞬く間に明かりが灯り、真つ暗だった部屋の全貌が明らかになった。

大人が数十人は入れそうな大きな部屋。

和真と萃香が暮らす家の面積の大部分をこの部屋が占めていた。

数台の四人用テーブルが丁寧に並べられ、その上に丸い形状の椅子が4つずつ置かれている。

奥には大きめな厨房があり、鍋や食器がこれまた丁寧に保管されている。

和真が全てのテーブルの上からイスを下げている間に、遅れてきた萃香が厨房に掛けられていた布巾を汲み置きしていた水で濡らし、テーブルの上をせっせと拭いている。

箒で床を軽く掃き、あらかたの準備を整えたところで入り口に降りていたシャッターを持ち上げる。

すると朝日が部屋の中に差し込み、思わず和真は目を細める。

小さく深呼吸をして、後ろに控える萃香を見やる。

「仕入れは済んでたよな？」

「うん、今朝早くに山田さんのところの兄ちゃんが運んできたよ。冷蔵庫の中に入ってると思う」

その言葉に頷き、和真は気を引き締める。

今日はなんだかいつもより、忙しくなりそうな予感がしていた。

「 国崎料理店、今日も営業開始だ」

プロローグ（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9294v/>

東方 嘘つきな男と小さな鬼の話

2011年10月29日02時06分発行